

牛塚古墳群

スズキ株式会社岡山総社納整センター建設に伴う発掘調査(1)

2017年3月

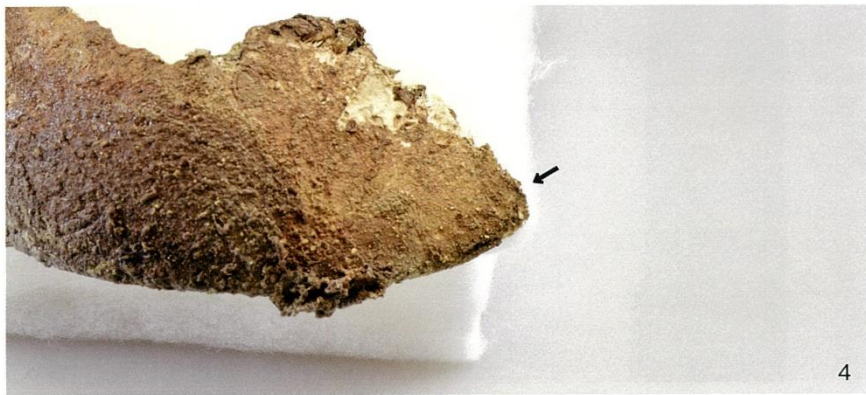
岡山県総社市教育委員会

牛塚古墳群

スズキ株式会社岡山総社納整センター建設に伴う発掘調査(1)

2017年3月

岡山県総社市教育委員会



1号墳第2主体人骨着裝貝釧 (1:表 2:裏 3:左腕貝釧内孔側列点 4:左腕貝釧外周列点)

卷頭図版 2



- 1 鉄剣1 漆塗り 豎櫛付着状況
- 2 鉄剣2 漆塗り 豎櫛付着状況
- 3 鉄剣2 織布付着状況
- 4 鉄槍5 豎櫛付着状況 (表面)
- 5 鉄槍5 豎櫛付着状況 (裏面)

序

今回報告する牛塚古墳群がある久代地域は、総社市西部の新本川流域に位置しています。新本川流域では、南北の小さな山々に挟まれた細長い平地に、のどかな田園風景が広がっています。治水技術が今ほど発達せず、自然をありのまま受け入れていた頃、高梁川の支流である穏やかな新本川の傍は、人々が川の恩恵を受けながら、落ち着いた平和な暮らしを営む上で格好の土地だったようです。

それを示すかのように、周辺には上原遺跡、横寺遺跡などの大きな集落跡や、伊与部山、新本立坂のような有力者層が眠る墳丘墓、また、一丁塚古墳群や長砂古墳群といった大小さまざまな古墳群など、かつての繁栄を窺うことができる遺跡が数多く存在します。

久代地域でも、巨大な横穴式石室を備えた久代大塚古墳、畿内中枢との関わりを示す横口式石槨をもつ長砂2号墳、古代吉備の経済基盤を支えたと考えられる板井砂奥製鉄遺跡群など、特色豊かな遺跡が知られています。

本書は、スズキ株式会社岡山総社納整センター建設に伴い実施した発掘調査のうち、牛塚古墳群（牛塚1・2号墳）について報告するものです。特に牛塚1号墳では家をかたどった埴輪や豊富な鉄器類、漆塗りの竪櫛、珍しい南海産貝製の腕輪などが見つかっています。古墳自体は小規模ながら、その出土品の多彩さには目を見張るものがあり、いにしへの久代地域の個性をより一層際立たせています。本書が今後の文化財の保護活用、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたっては、関係諸機関や調査に参加していただいた皆様、地元久代地区の皆様には、多大な御支援・御協力をいただき、記して深謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

総社市教育委員会

教育長 山 中 榮 輔

例 言

1. 本書は、平成 11・12 年度に総社市教育委員会が実施したスズキ株式会社岡山総社納整センター建設に伴う発掘調査のうち、牛塚古墳群（1・2号墳）の調査成果を報告するものである。
2. 調査は、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。
3. 調査は、平成 11 年 11 月 1 日から平成 12 年 12 月 22 日の期間で実施した。
整理作業、報告書作成作業は、平成 28 年度に実施した。
4. 調査は、総社市教育委員会文化財室（のち文化課）谷山雅彦が担当して行った。
5. 整理作業は村田 晋・谷山が担当して行い、整理作業員は以下のとおりである。
総社市埋蔵文化財学習の館 犬飼真弓、田中富子
6. 本書の執筆・編集は村田が担当した。第 3 章第 1 節「岡山県総社市久代牛塚 1 号墳出土貝釦について」は、矢掛町教育委員会 生涯学習係 西野 望氏の玉稿を賜りました。また、貝釦のトレース図を熊本大学文学部教授 木下尚子氏からご提供いただきました。その他、御二方からは貝釦について多くをご教示いただきました。記して深く感謝申し上げます。
7. 調査で出土した遺物、発掘調査および整理作業において作成した遺構・遺物の実測図や写真等の記録類は、総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手 265-3）にて保管している。

凡 例

1. 挿図の複製・一部加筆は、総社市発行の都市計画地図 25,000 分の 1 地形図を基に作成している。
2. 本書の標高値は海拔高であり、遺構実測図の方位は調査当時の日本測地系（系番号 5）による座標北である。



総社市位置図

目 次

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の体制	2
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 調査の概要	6
第1節 牛塚1号墳	6
第2節 牛塚2号墳	27
第3節 古墳に伴わない遺物	31
第4章 総括	33

図 目 次

第1図	調査地全体図 (S = 1/5,000) ……………	3	第14図	牛塚1号墳出土須恵器 (S = 1/4) ……………	18
第2図	遺跡と移設後五輪塔の現況 ……………	3	第15図	牛塚1号墳副葬鉄器① (S = 1/2) ……………	19
第3図	周辺主要遺跡分布図 (S = 1/50,000) ……	4	第16図	牛塚1号墳副葬鉄器② (S = 1/2) ……………	20
第4図	牛塚古墳群位置図 (S = 1/1,000) ……	7	第17図	牛塚1号墳出土貝釧 (S = 1/3) ……………	23
第5図	牛塚1号墳墳丘測量図 (S = 1/300) ……	8	第18図	牛塚2号墳中世五輪塔実測図 (S = 1/40) ……………	27
第6図	牛塚1号墳墳丘断面図 (S = 1/120) ……	9	第19図	牛塚2号墳墳丘測量図・断面図 (測量図はS = 1/200, 断面図はS = 1/120) ……	28
第7図	牛塚1号墳主体部配置図 (S = 1/40) ……	10	第20図	牛塚2号墳主体部実測図 (S = 1/30) ……	29
第8図	牛塚1号墳第1主体実測図 (S = 1/30) ……	11	第21図	牛塚2号墳出土遺物 (S = 1/4) ……………	30
第9図	牛塚1号墳第2主体実測図 (S = 1/30) ……	12	第22図	古墳に伴わない遺物① (S = 1/4) ……………	31
第10図	牛塚1号墳出土埴輪① (S = 1/4) ……	14	第23図	古墳に伴わない遺物② (S = 1/2) ……………	31
第11図	牛塚1号墳出土埴輪② (S = 1/4) ……	15	第24図	墳丘後行型古墳の例 (S = 1/400) ……	33
第12図	牛塚1号墳出土埴輪③ (S = 1/4) ……	16			
第13図	牛塚1号墳出土埴輪④ (41・42はS = 1/4, 43はS = 1/6) ……	17			

表 目 次

第1表	牛塚1号墳貝釧出土状況ならびに共伴遺物 ……………	24
第2表	古墳時代ゴホウラ製貝釧の時期比定と列点文をもつ貝釧 ……………	25
第3表	遺物一覧 ……………	35

巻頭図版目次

巻頭図版1

- 1号墳第2主体人骨着裝貝釧
- 1 表
- 2 裏
- 3 左腕貝釧内孔側列点
- 4 左腕貝釧外周列点

巻頭図版2

- 1 鉄剣1 漆塗り 豎櫛付着状況
- 2 鉄剣2 漆塗り 豎櫛付着状況
- 3 鉄剣2 織布付着状況
- 4 鉄槍5 豎櫛付着状況 (表面)
- 5 鉄槍5 豎櫛付着状況 (裏面)

図 版 目 次

図版 1	1 牛塚1号墳調査前近景（北西から）	39
	2 牛塚1号墳西トレンチ（西から）	
	3 牛塚1号墳西側周溝（北西から）	
図版 2	1 牛塚1号墳東トレンチ（北東から）	40
	2 牛塚1号墳東側周溝（北から）	
	3 牛塚1号墳南トレンチ（南東から）	
図版 3	1 牛塚1号墳南側周溝（東から）	41
	2 牛塚1号墳北トレンチ（北東から）	
	3 牛塚1号墳北側周溝（北東から）	
図版 4	1 牛塚1号墳墳頂家形埴輪出土状況（南西から）	42
	2 牛塚1号墳墳丘断面（北から）	
	3 牛塚1号墳墳丘断面（南から）	
図版 5	1 牛塚1号墳墳丘断面南北畦除去後（北から）	43
	2 牛塚1号墳第1主体検出状況（北から）	
	3 牛塚1号墳第1主体検出状況（東から）	
図版 6	1 牛塚1号墳第1主体蓋石除去（北東から）	44
	2 牛塚1号墳第1主体蓋石除去（北から）	
	3 牛塚1号墳第1主体鉄器副葬状況（北西から）	
図版 7	1 牛塚1号墳第2主体検出状況（北東から）	45
	2 牛塚1号墳第2主体人骨検出状況（南東から）	
	3 牛塚1号墳第2主体人骨検出状況（南西から）	
図版 8	1 牛塚1号墳第2主体鉄器副葬状況（南西から）	46
	2 牛塚1号墳第2主体鉄器副葬状況（北西から）	
	3 牛塚1号墳調査風景	
図版 9	1 牛塚1号墳調査後近景（南東から）	47
	2 牛塚1号墳調査後近景（北から）	
	3 牛塚1号墳調査後近景（北東から）	
図版10	1 牛塚2号墳調査前近景（西から）	48
	2 牛塚2号墳墳頂五輪塔（南西から）	
	3 牛塚2号墳墳頂五輪塔（北から）	
図版11	1 牛塚2号墳南側周溝（西から）	49
	2 牛塚2号墳北側周溝（北西から）	
	3 牛塚2号墳主体部検出状況（南東から）	
図版12	1 牛塚2号墳主体部検出状況（南から）	50
	2 牛塚2号墳調査後近景（南から）	
	3 牛塚2号墳調査後近景（南西から）	
図版13	1 牛塚1号墳出土埴輪①	51
	2 牛塚1号墳出土埴輪②	
	3 牛塚1号墳出土埴輪③	
図版14	1 牛塚1号墳出土埴輪④	52
	2 牛塚1号墳出土埴輪⑤	
	3 牛塚1号墳出土埴輪⑥	
図版15	1 家形埴輪屋根部片①	53
	2 家形埴輪屋根部片②	
	3 家形埴輪破風板	
	4 家形埴輪上屋根側面突帯	
	5 家形埴輪棟木	

	6	家形埴輪身舎外面①	
	7	家形埴輪身舎外面②	
	8	家形埴輪裾廻突帯	
図版16	1	牛塚1号墳出土須恵器	54
	2	牛塚2号墳出土遺物	
	3	古墳に伴わない遺物	
図版17	1	牛塚1号墳副葬鉄器	55

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

スズキ株式会社岡山総社納整センター造成事業は、新車の納車前整備を集中的に行い、それぞれの営業拠点に配送するための集中納整センター建設に伴う造成工事である。月間の納整台数は6000台が予定されており、有効敷地として約110,000㎡の確保が必要となった。また、立地条件として、港からのアクセス、塩害のないこと、中国・四国地区への配送ルートが確保できることが挙げられたが、これらの条件を満たす既造成地がないことから、新たに選地し造成することとなった。

総社市久代地区は、交通網の整備により港や高速自動車道にアクセスしやすい位置にある。このため、同様の条件を求め、以前にも工業団地が造成された経緯があり、今回は地区内の丘陵部2箇所とその間の谷部が開発されることとなった。

計画地内では、大正から昭和にかけて農地の区画整理が実施され、ブドウの栽培により地形の改変が進んでいた。さらに、ハウスが放置され原野に等しい土地が増加していた。開発が計画された時点においては遺跡の存在は明確でなく、『吉備郡史』に古墳の記載があるのみであった。先の開発で多くの遺跡が発見された工業団地同様に、周知されていない埋蔵文化財の存在が予測されたので、平成11年3月31日に事業者・岡山県教育委員会・総社市教育委員会の3者間で文化財保護に関する覚書を締結した。

この覚書に基づいて、用地内の埋蔵文化財分布調査・試掘調査を総社市教育委員会を実施することとした。この時点では、耕作や青果の収穫などの予定があったため、調査地点は掘削可能な土地から選び、立木の伐採などは行わなかった。分布調査・試掘調査は、平成10年5月25日から同年6月28日の間に実施した。

調査は用地中央の水田部分から開始したが、湧水のため北端部分は後日とし、水田部分でも高所にあたる所から調査することとなった。調査は土地承諾の制約や土地の改変があるため、遺跡の範囲を完全に押さえることはできなかった。用地全体では設定したトレンチ64本のうち、遺構等がなかったのは36本であった。今回の調査で遺構の希薄な地区は、西尾根東斜面付近だけであった。

調査の結果から、両丘陵部分には弥生時代の集落と古墳が、水田部分の高所には弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在し、用地の最も南部分では地下げが進んでいるが、製鉄関連遺構が存在することが明らかになった。このうち、東丘陵上の古墳（牛塚1号墳）が径20mを超えることが明らかになり、岡山県教育委員会の指導を得ながら事業者と保存協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。平成11年10月4日に事業者と総社市教育委員会の間で発掘調査覚書を締結し、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の体制

調査は総社市教育委員会が、全般的に岡山県教育委員会から指導・助言を受けながら実施し、分布・試掘調査並びに発掘調査は、谷山雅彦が担当して行った。

調査組織（平成 11 年度）

総社市教育委員会

教育長	秋田 皓二
教育次長	守長 健尚
文化財室長	加藤 信二
主 査	谷山 雅彦
主 任	武田 恭彰
主 事	平井 典子
主 事	前角 和夫
主 事	高橋 進一
主 事	笹田 健一
主 事	松尾 洋平

総社市埋蔵文化財学習の館

館 長	村上 幸雄
臨時職員	近藤 雅子
臨時職員	田中 富子

調査組織（平成 12 年度）

総社市教育委員会

教育長	秋田 皓二（9月30日退任）
	栗田 交三（11月24日就任）
教育次長	守長 健尚
文化課長	加藤 信二
係 長	谷山 雅彦
主 任	武田 恭彰
主 任	平井 典子
主 事	前角 和夫
主 事	高橋 進一
主 事	笹田 健一
主 事	松尾 洋平

総社市埋蔵文化財学習の館

館 長	村上 幸雄
臨時職員	近藤 雅子
臨時職員	田中 富子

第3節 調査の経過

発掘調査は、工事の進捗状況に合わせてブロックごとに行った。まず、牛塚1・2号墳の調査にはじまり、東の尾根の西側斜面および中央部緩斜面の集落遺跡、西の尾根の古墳および集落、その間にも試掘調査で確認できなかった丘陵裾部を中心とした確認調査と工専用道路兼周回道路用地の集落および製鉄遺跡の調査、そして、南東端の緩斜面・牛塚1号墳まわりの集落と順次進み、とくに発掘調査後半期においては週単位で調査地が移動することも多かった。

発掘調査期間は、当初は平成11年11月1日から平成12年7月31日で合意したが、調査の進展にしがたい遺跡範囲が広がるなどしたことから延長せざるを得ず、最終的に平成12年12月22日に事業完了となった。調査期間中の平成12年12月3日には牛塚1号墳の現地説明会を実施し、当日は200名の参加者を得た。なお、牛塚古墳群で検出された石棺および五輪塔は、外周道路沿いの一角に移設し、説明板を設置して自由に見学できるよう整備した。



第1図 調査地全体図 (S=1/5,000) (前角 2001 年より)



第2図 遺跡と移設後五輪塔の現況

参考文献

- 谷山雅彦 2001 「(仮称) 岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』10 総社市教育委員会 7～9頁
- 前角和夫 2001 「岡山納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』11 総社市教育委員会 29～34頁

第2章 遺跡の位置と環境

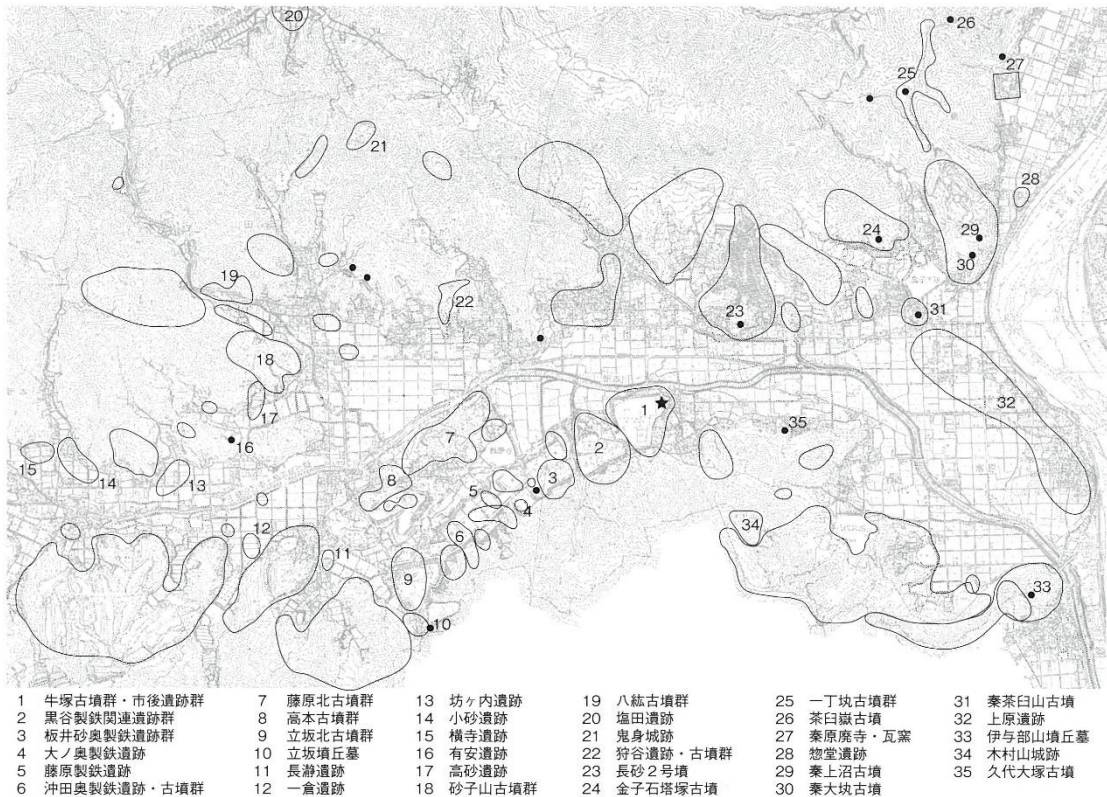
今回調査対象となった牛塚古墳群は、総社市久代字押木田 895-5 に所在した。高梁川の西側、一次支流である新本川流域には東西に長い平野が広がっている。平野の北側には正木山山塊、南側には高山山塊・馬入山山塊があり、牛塚古墳群は馬入山から北に派生した丘陵の先端部に位置している。馬入山を挟んで南側には、小田川下流域に属する真備平野が広がっている。

弥生時代以前

新本川流域に限っては、旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代早期の無節縄文土器が出土した長瀨遺跡が最も古い。弥生時代に入ると遺跡数は増加し、弥生時代前期から古墳時代前期の上原遺跡、弥生時代中期の有安遺跡、弥生時代中期から古墳時代初頭の横寺遺跡、弥生時代の坊ヶ内遺跡などの集落のほか、立坂墳丘墓、伊与部山墳丘墓などの特定集団墓が確認されている。特に、上原遺跡の人面土製品、横寺遺跡の小銅鐸、家形土製品、絵画土器など、集落祭祀に関わる形象遺物の集中的な出土が目される。

古墳時代

新本川流域で確認されている古墳時代集落はそう多くはないが、上原遺跡・横寺遺跡・高砂遺跡で前期の、惣堂遺跡で中期の、小砂遺跡で前期と後期の、坊ヶ内遺跡で後期の遺構・遺物がそれぞれ確認されている。前期古墳としては、流域北東部の秦地域において茶臼嶽古墳、一丁坑1号墳の大型前方後方墳が続けて築造されているほか、前方後円墳である大坑古墳、墳形は不明だが三角縁四神四獣



第3図 周辺主要遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)

鏡の出土が伝えられる秦上沼古墳がある。また、流域南東部の下原地域では伊与部山墳丘墓に続く伊与部2号方墳が、流域北西部の山田地域では、30 m級の前方後円墳を含む砂子山古墳群が築かれる。中期古墳として挙げられるものは、いずれも中小古墳であり、前段階ほど大型の古墳は見つかっていない。秦地域の一丁垧古墳群や金子古墳群など中小古墳からなる初期群集墳や、牛塚古墳群周辺では久代の長砂古墳群、流域西端部の新本地域では高本3～5号墳などが築造されている。後期・終末期古墳には、秦金子石塔塚古墳、久代大塚古墳、横木林の塚古墳などの大型横穴式石室をもつもの、立坂北古墳群、藤原北古墳群、黒谷古墳群など群として築かれるものなど、中期に引き続き活発な造墓活動が窺われる。このうち、金子石塔塚古墳は渡来系遺物をもつ。また、長砂2号墳は県内唯一の横口式石槨をもち、畿内中枢との関わりが想定される。

古 代

久代地域周辺で最も注目されるのが、沖田奥製鉄遺跡、藤原製鉄遺跡、大ノ奥製鉄遺跡、板井砂奥製鉄遺跡、黒谷製鉄関連遺跡など、7～8世紀代を前後する時期の製鉄遺跡群が集中して確認されることである。また、秦地域では白鳳期よりも古く中四国地方最古の飛鳥寺院として、秦原廃寺が創建されており、廃寺の北側では瓦窯もみついている。早い段階に寺院を導入できた背景に、上述の鉄生産が基盤にあったと想定する意見もある。

参考文献

- 鎌木義昌・近藤義郎・中田啓司・葛原克人編 1987『総社市史』考古資料編 総社市
- 高田明人 1993「惣堂遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 7～9頁
- 武田恭彰 1993「藤原北古墳群」総社市埋蔵文化財発掘調査報告11 総社市教育委員会
- 武田恭彰 1994a「横寺遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会 26～31頁
- 武田恭彰 1994b「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査1」「新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査2」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 32～41頁
- 武田恭彰 1995「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その2」「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その3」「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その4」「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その5」『総社市埋蔵文化財調査年報』5 総社市教育委員会 31～43頁
- 武田恭彰 1996「新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査 その6」『総社市埋蔵文化財調査年報』6 総社市教育委員会 63～67頁
- 武田恭彰 2004「山田地区区営ほ場整備事業に伴う発掘調査（7）」『総社市埋蔵文化財調査年報』13 総社市教育委員会 19～22頁
- 谷山雅彦 1986『高本古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告3 総社市文化振興財団
- 谷山雅彦・高橋進一・村田 晋 2014『一丁垧古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告23 総社市教育委員会
- 前角和夫 1993「高本1・6号墳の発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 5～6頁
- 前角和夫 1996「西団地拡張に伴う発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』6 総社市教育委員会 50～62頁
- 松尾洋平 2010「上原遺跡発掘調査報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』19 総社市教育委員会 65～102頁
- 村上幸雄 1987『長砂古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告5 総社市教育委員会
- 村上幸雄・谷山雅彦・高田明人ほか 1991『西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告9 総社市教育委員会
- 村田 晋 2016『茶臼嶽古墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告24 総社市教育委員会

第3章 調査の概要

第1節 牛塚1号墳

墳 丘（第5・6図，図版1～5・9）

北側の平野に向かって舌状に張り出す丘陵尾根頂上に位置する。古墳は開発前の協議でみつかったもので、『吉備郡史』の記述から牛塚古墳と命名された。墳丘は北東部分を残して大きく削平を受けていたものの、トレンチ各所で周溝を確認することができた。周溝はすべて地山を切り込んで成形され、南側・西側において深く、北側・東側においては加工の程度は低い。検出した周溝により、墳丘は径22mの円墳であることが明らかとなった。表面観察、壁面観察において段築は認められず、また、葺石も検出されなかった。

墳頂部の調査では、外縁に円筒埴輪列が一行検出された。また、中央部で家形埴輪片がまとまって出土した。墳丘構築後、墳頂部外縁に円筒埴輪列、墳頂部中央に家形埴輪を据えたものと考えられる。なお、墳裾部において原位置を保った埴輪の出土はなく、すべて上方からの転落と考えられる状況であったことから、墳裾部の埴輪樹立はなかったことがわかる。

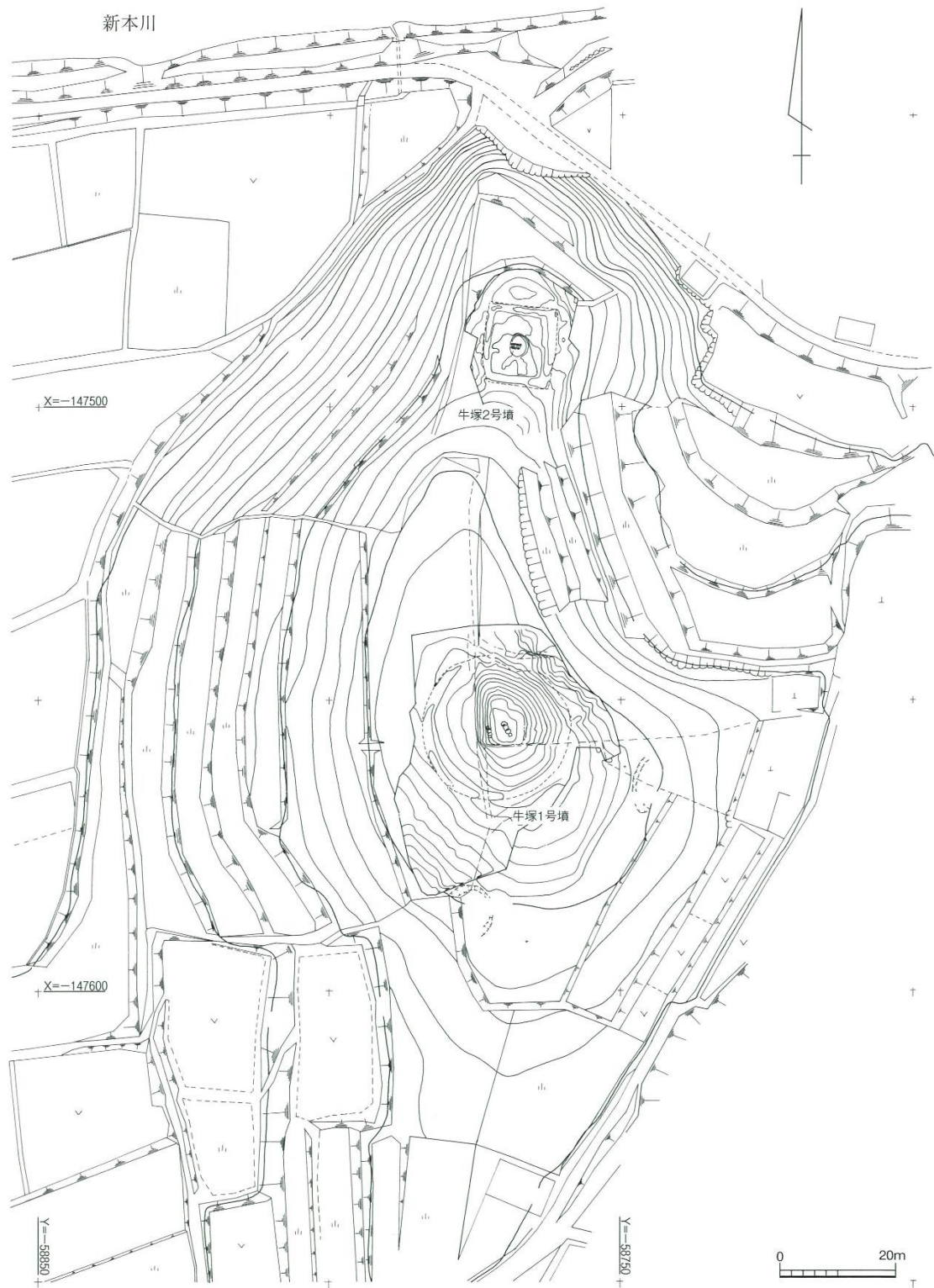
主体部としては、後述するように石棺2基が検出されたが、東側の第1主体は、石棺床面が削り出した地山直上に設けられ、第1主体が埋葬された後、西側の第2主体がさらに上位の盛土内に設けられている。その後、さらに墳丘盛土が施され、墳丘が構築完了となるが、結果、墳頂部から第1主体床面までの深さは約2.1mにもなる。

埋葬施設（第7～9図，図版5～8）

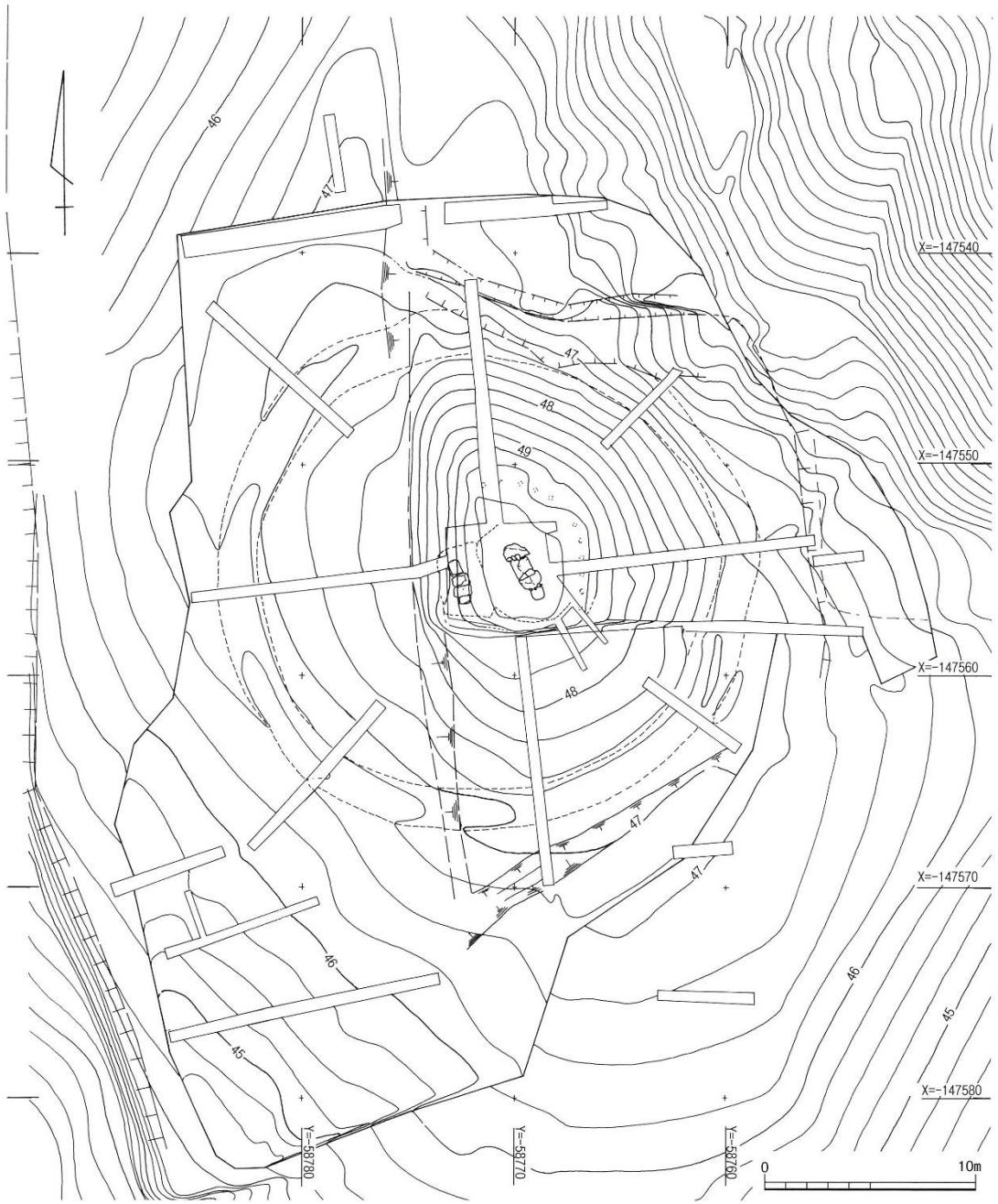
石棺2基を検出した。どちらも主軸を北北西-南南東方向に揃えているが、頭位は真逆を向いている。東側の第1主体は、墳丘最下層の地山付近で検出された。地山加工後、30～40cm程の整地盛土を施した上で長さ5.2m、幅3.6m前後の墓壙を掘り込み、床面レベルが地山まで達したら、地山を部分的に掘り窪めて石棺側板と小口板を設置し、水平に裏込め土を施して石棺を構築する。遺骸設置と副葬行為の後、蓋石4枚を載せて、蓋石間には角礫を置き、粘土を詰めて密閉する。最後に蓋石の上に封土を小高く盛り、埋葬完了となる。蓋石には0.5～1.0m程に割った石材、それを補う角礫には20～40cm程の石材を使用している。石棺規模は内法で長さ1.8m、幅40cm程で、側板には長さ0.5～1.0m、幅50cm前後、厚さ20cm弱、小口には長さ38～55cm、幅40cm前後、幅厚さ9～12cmに割った石材を使用している。棺内南東小口側には2個の角礫による石枕が置かれ、その隣に鉄剣を副葬している。鉄剣には漆塗り堅櫛の付着が認められ、同時に副葬されたことがわかる。

西側の第2主体は、第1主体封土上に施された盛土を切り込んで設けられている。墓壙は2段掘りで、残存規模は長さ3.4m、幅2.5m程である。第1主体同様、墓壙底面を部分的に掘り窪めて石棺側板と小口板を設置し、裏込め土を施す。遺骸設置、副葬行為の後には、石棺の外側に角礫を配置し、その後4枚の蓋石を載せ、蓋石の間に粘土を詰めて密閉する。その後、墓壙を埋めて埋葬完了となる。第1主体のような小高い封土は形成されない。

蓋石は40～80cm程の大きさに割った石材を使用している。石棺外側の角礫は数cm～20cm程のものを選んでい。石棺規模は、内法で長さ1.7m、幅40cm程で、側板には長さ50～60cm、幅30～40cm、厚さ15cm弱に割った石材を、小口板には長さ40cm前後、幅25～40cm程、厚さ



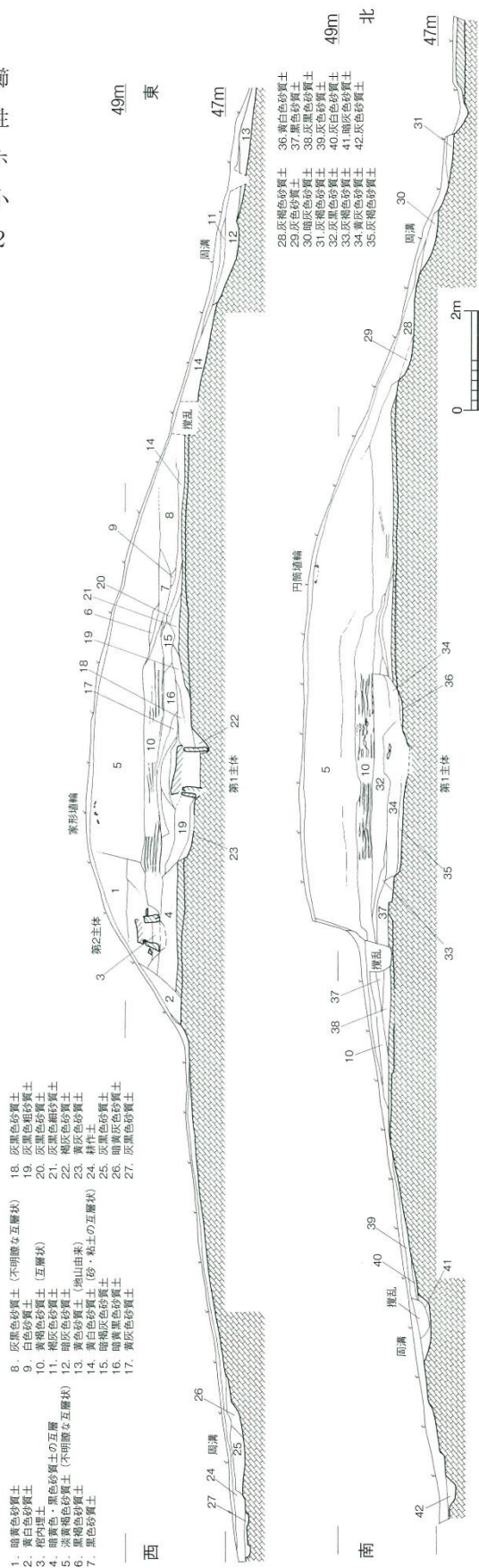
第4図 牛塚古墳群位置図(S=1/1,000)



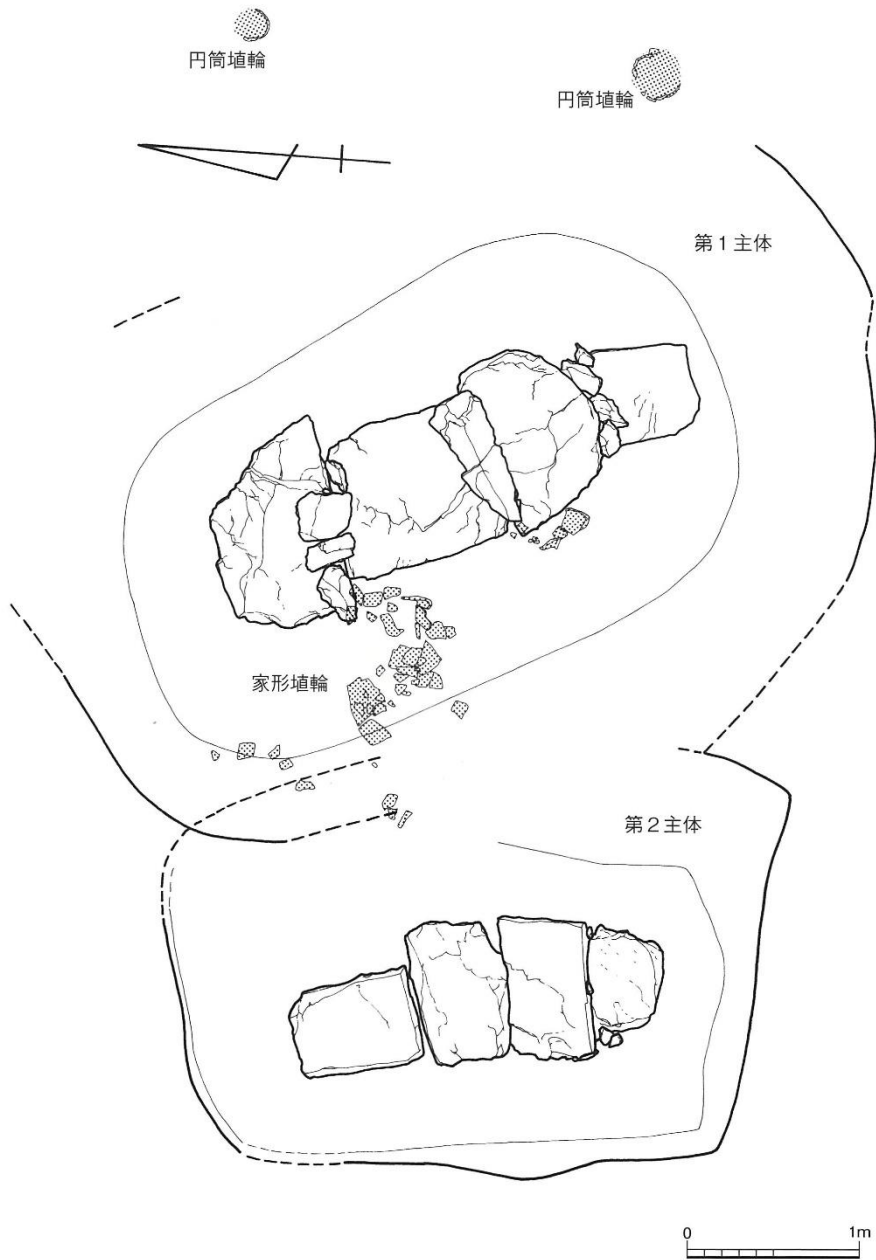
第5図 牛塚1号墳墳丘測量図(S=1/300)

10cm 強の石材を使用している。

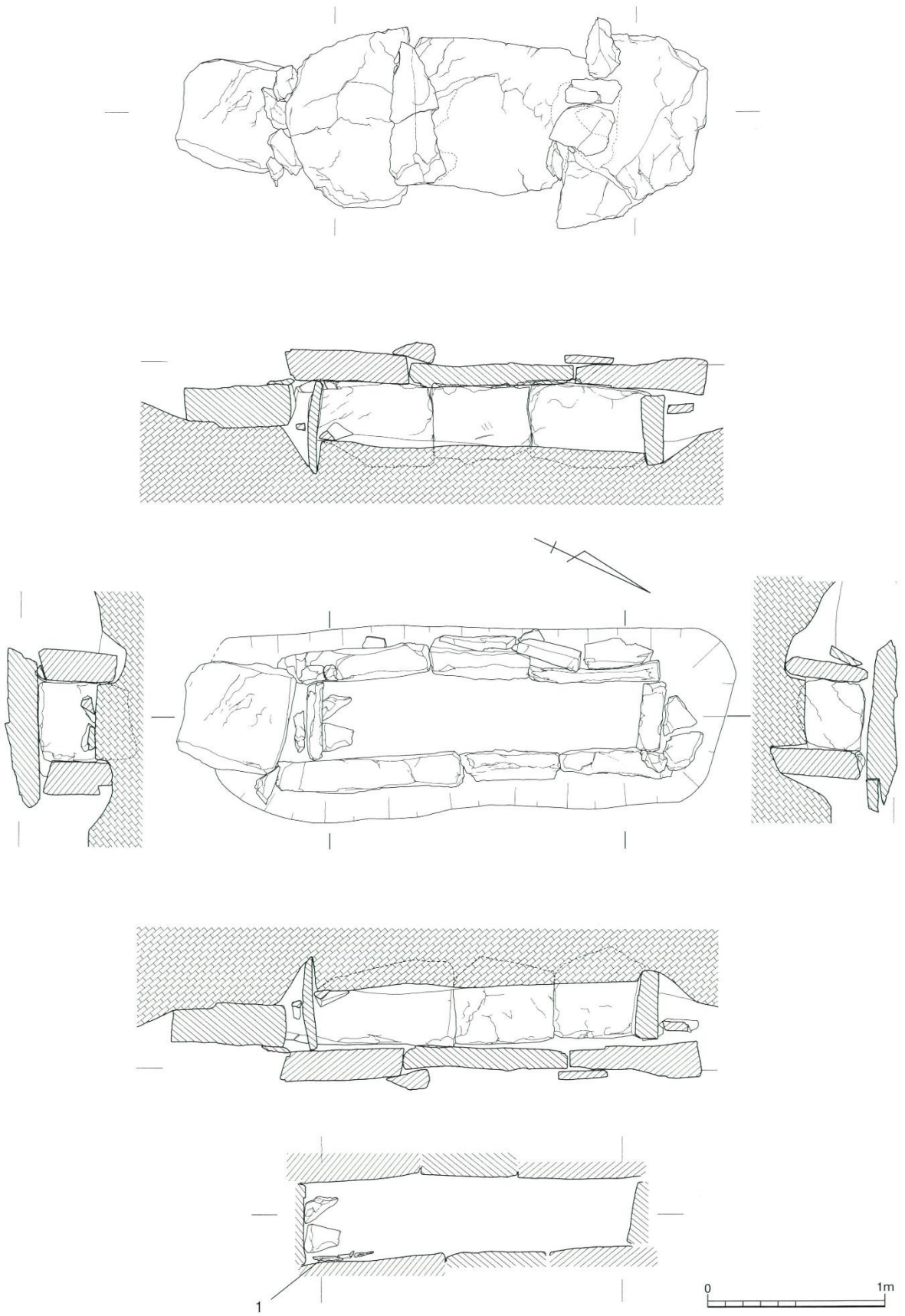
蓋石の下、棺外両側には、鉄器類と豎櫛が副葬されていたほか、棺内では成人男性と考えられる人骨が検出され、両腕にゴホウラ製貝釧が装着されていた。棺内北西小口側、人骨下部には、第1主体と同様に2個の角礫による石枕が置かれていた。



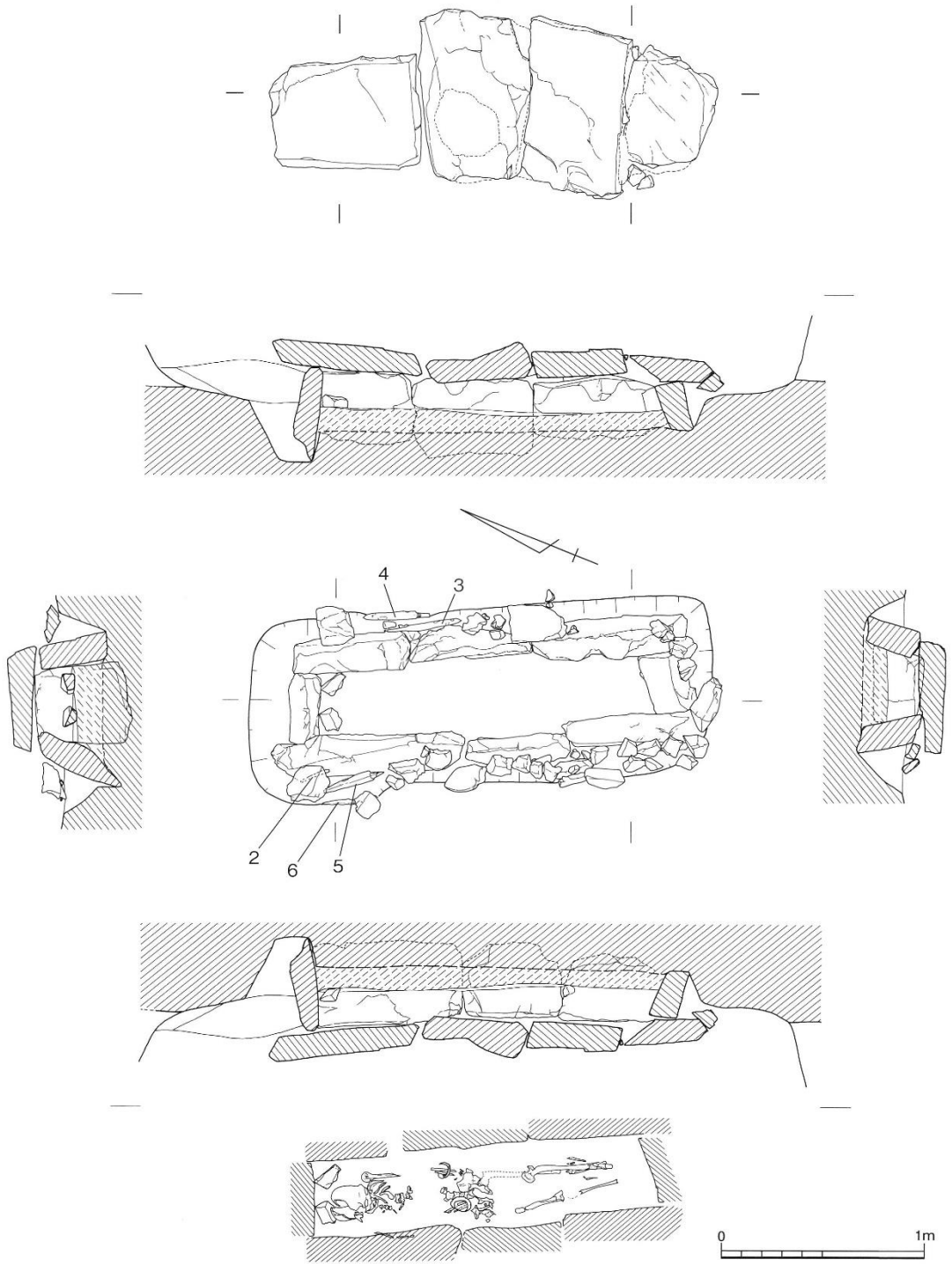
第6図 牛塚1号墳墳丘断面図(S=1/120)



第7図 牛塚1号墳主体部配置図(S=1/40)



第8図 牛塚1号墳第1主体実測図(S=1/30)



第9図 牛塚1号墳第2主体実測図(S=1/30)

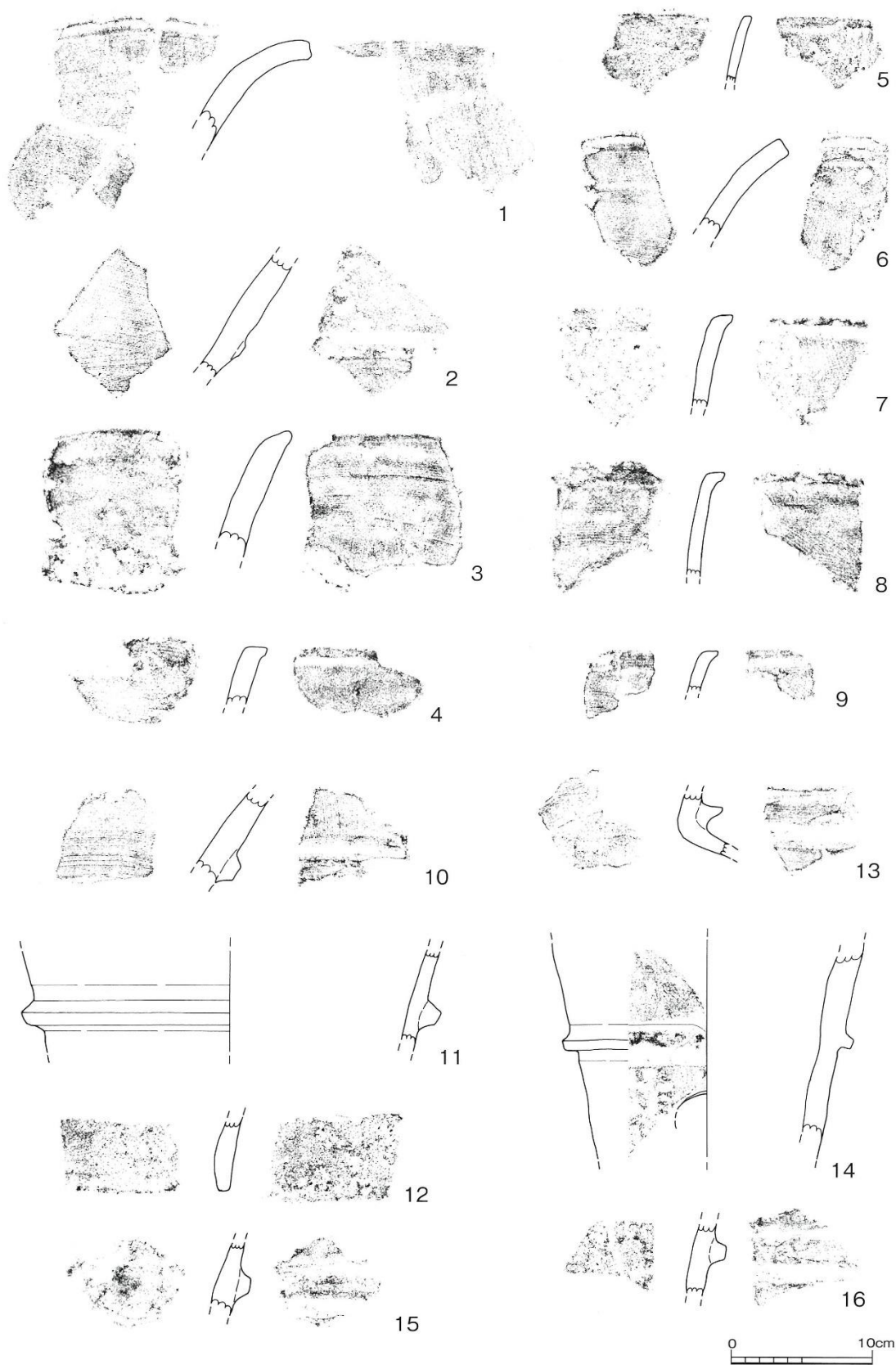
出土遺物

(1) 埴輪（第10～13図，図版13～15）

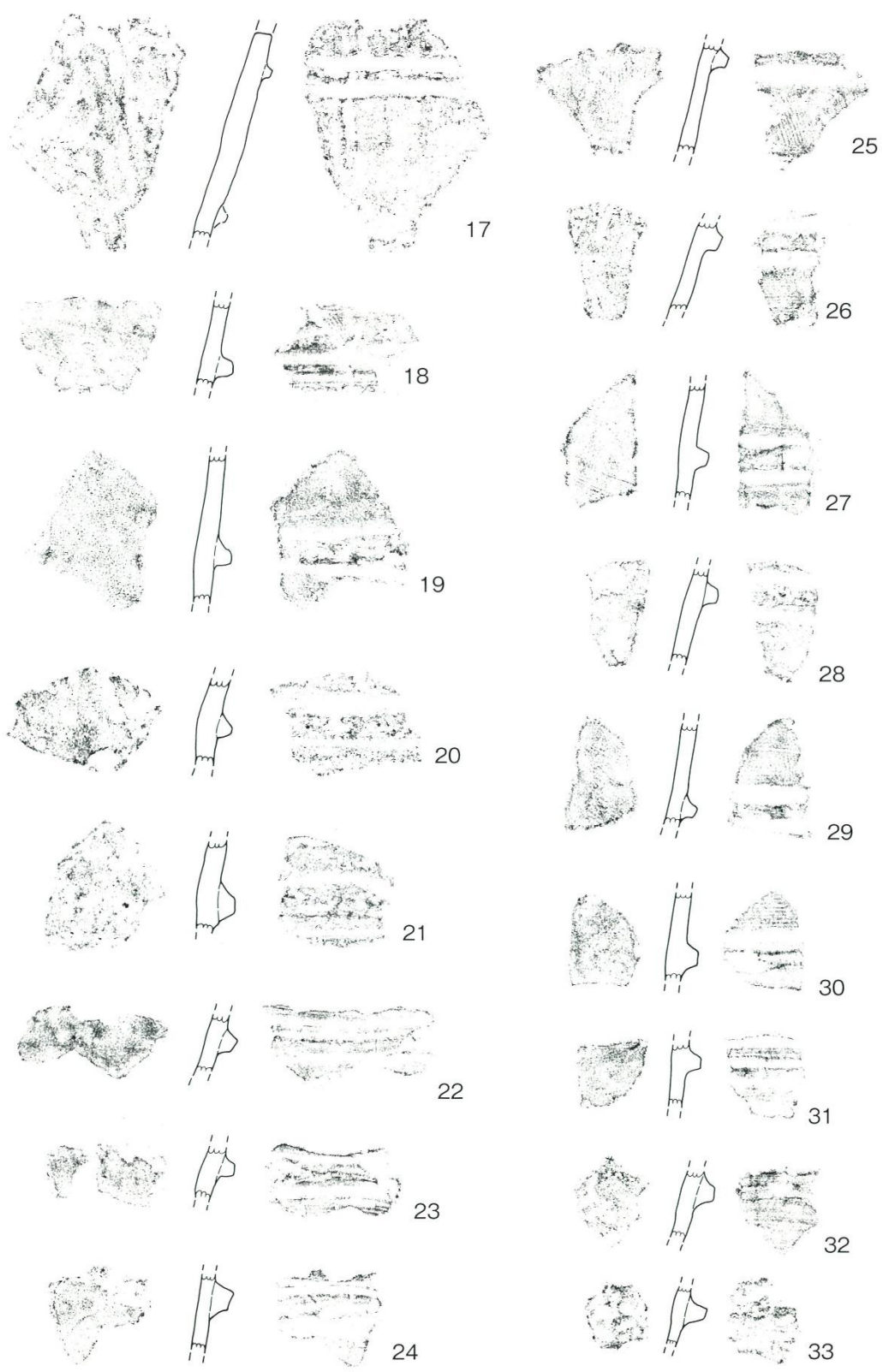
1号墳出土の埴輪は破片総量でコンテナ約4箱分あり，普通円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪，家形埴輪，壺形埴輪などの器種がある。埴質のものを中心とするが，円筒埴輪には須恵質のものが若干混じり，すべて無黒班である。墳頂部外縁では円筒埴輪片が，一部基底部を残して列状に出土し，墳頂部中央では家形埴輪片がまとまって出土した。その他の埴輪片も，墳頂部を中心に出土したもので，墳丘斜面や埴裾から出土した個体含め，本来はすべて墳頂に据えられたと考えられる。

円筒埴輪は，普通円筒が殆どで，朝顔形は少数である。突帯の断面形態はすべて台形で突出度合いも弱くはなく，端面の凹みはない。1～10は円筒埴輪の口縁部片である。端部は3のように丸みを残すもの，5・6のように面を作り箱形になるもの，4・7～9のように外方に張り出すものの三形態が確認できる。器面は，基本的に外面はタテハケあるいはナナメハケ，内面はナナメハケあるいはヨコハケで整え，突帯付近と口縁はナデつけて仕上げている。3は外面タテハケの後，内面から外面まで広範囲をヨコナデで整えている。7・8は外面二次調整としてヨコハケを加えている。8は内面からナナメハケで口縁を外側に倒している。9は須恵質である。10～12は同一個体であり，11・12は内外とも風化のためかハケが観察されないが，基底部はナデにより仕上げている。13は朝顔形埴輪の口縁基部である。突帯は強くナデつけて接着し，内面は上位にのみナナメハケが観察される。

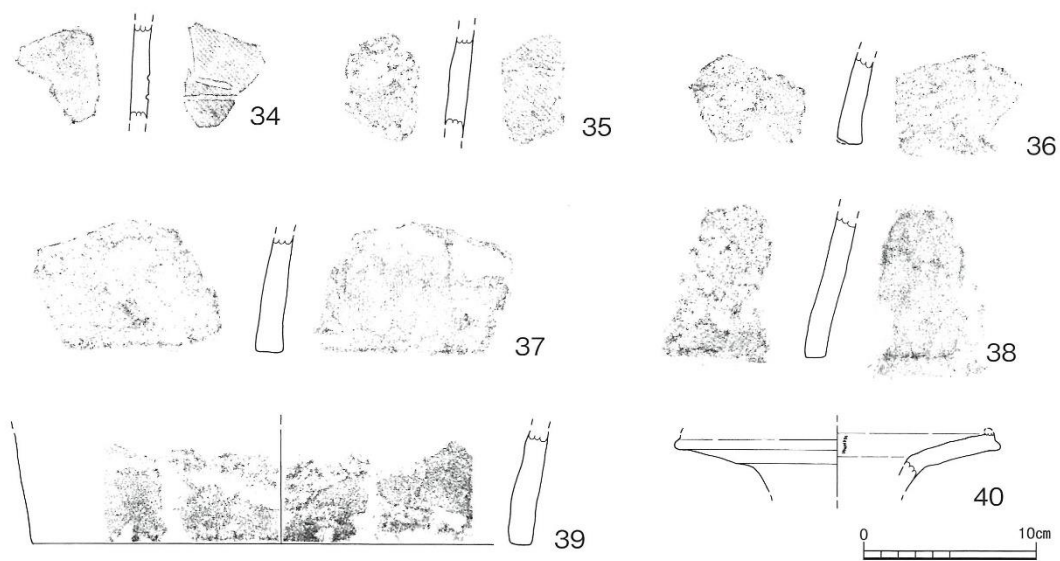
14～35は体部片である。18・22・30・31・34は須恵質，その他は埴質である。基本となる調整は，外面はタテハケあるいはナナメハケの後，二次調整としてヨコハケを施すもので，内面はナデつけるだけのもの，ハケを施すものの二通りがある。突帯はナデつけにより接着する。14は外面には二次調整としてB種ヨコハケを施し，内面は縦位のナデ痕と粘土の継ぎ目が観察されるほか，円形透孔が穿たれている。円形透孔は，17・25にも観察される。径20cm強であり，口縁部はこれより径が大きくなると考えられるが，小型の個体である。19は外面にC種ヨコハケが施される。34は外面ヨコハケ後に直線と弧，35は外面ヨコハケ後に弧と弧が組み合わさったヘラ記号をそれぞれ施している。



第10図 牛塚1号墳出土土埴輪①(S=1/4)



第11图 牛塚1号墳出土埴輪②(S=1/4)

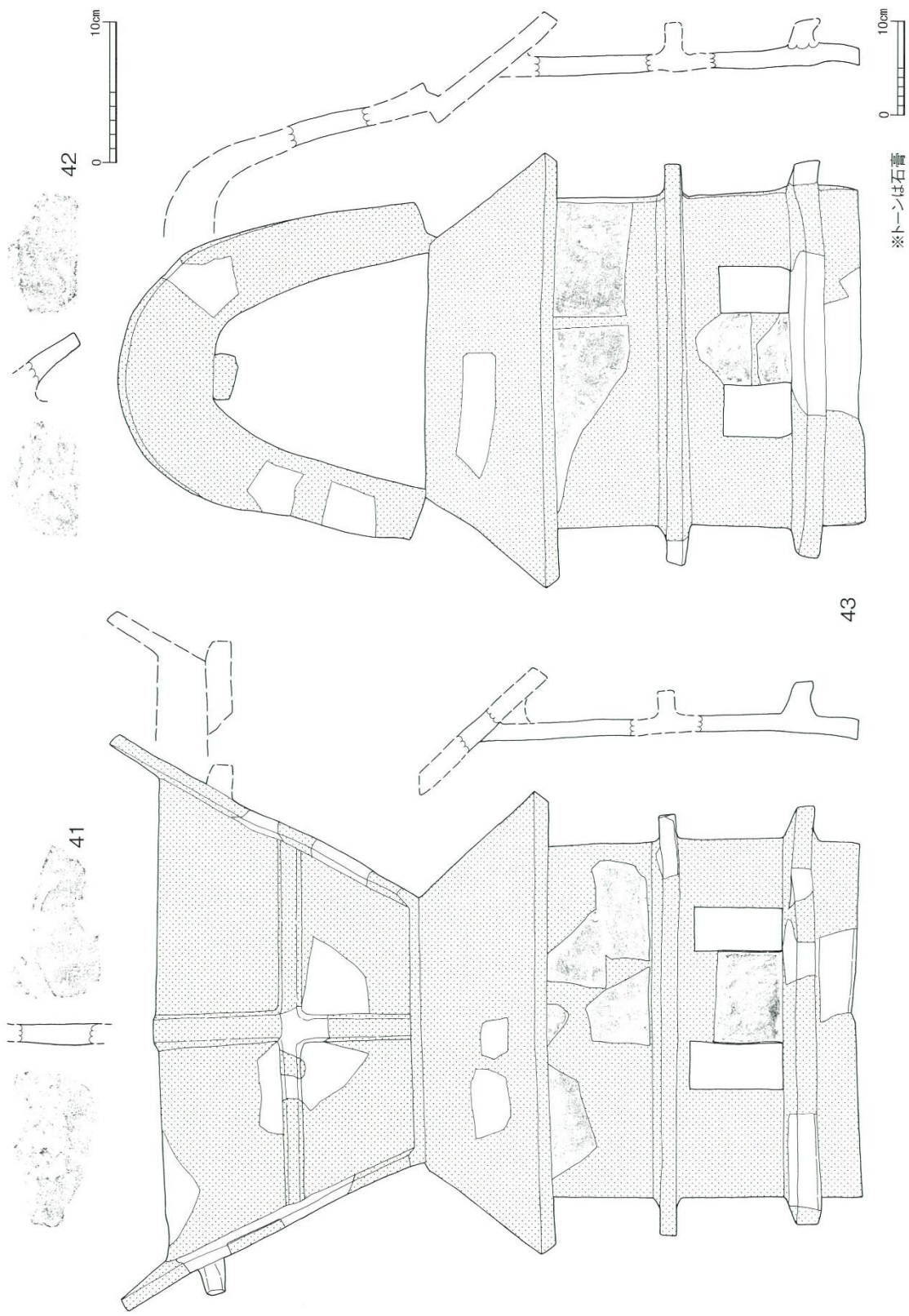


第12図 牛塚1号墳出土埴輪③(S=1/4)

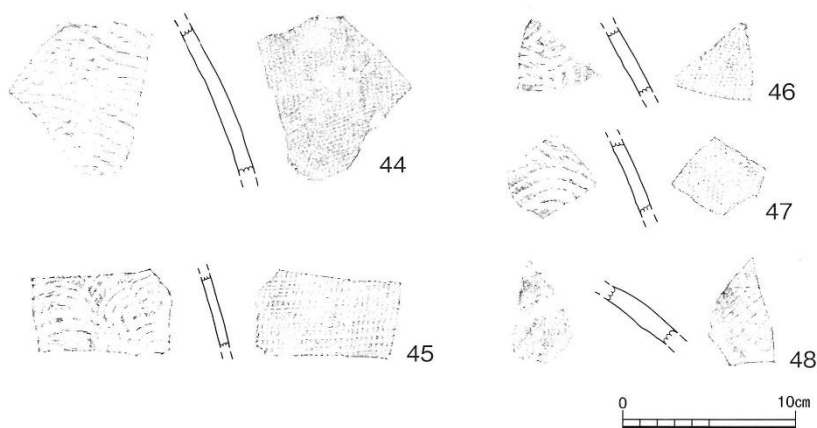
36～39は基底部片である。37は内面が風化で不明だが、外面はタテハケにより仕上げられる基底面は広く、平坦に仕上げられる。39は外面にC種ヨコハケ、内面はヨコハケあるいはナナメハケにより整えている。基底面は平坦に仕上げている。

40は橙色がかった胎土が他の埴輪のそれと似ることから、壺形埴輪口縁部の可能性がある。頸部から大きく外方に開く形状で、内外をナデつけて仕上げている。内面は縦位の列点文が並ぶ。

41～43は家形埴輪である。41は屋根片と思われる。外面は沈線により区切られた後、タテハケが充填される。内面はナデにより整えられる。42は屋根片である。外面は軒に平行する沈線が施され、その後斜線が刻まれる。各部の破片を基に復元したものが43である。入母屋造りとなり、身舎には裾廻突帯と上位にもう一つ突帯がつき、一段目部分の各辺には2箇所以上の方形窓があると考えられる。切妻部の妻側には破風板が取り付け、棟木は外へ露出する部分だけを作り付けている。壁面全体と、破風板にはハケが施され、裾廻突帯と基部はナデによって仕上げている。器壁内面はナデつけによって調整されている。観察可能な各部の特徴について記述したが、図はあくまで復元案であり、全形や法量など変更の余地があることを断っておく。



第13図 牛塚1号墳出土埴輪④ (41・42はS=1 / 4, 43はS=1 / 6)



第14図 牛塚1号墳出土須恵器(S=1/4)

(2) 須恵器 (第14図, 図版16-1)

44～47は甕である。いずれも胴部と考えられ、外面に格子目タタキ、内面に磨り消さない円弧状当て具痕が観察される。46・47では、外面格子目タタキの後、クシナデが施されている。48は壺の肩部と考えられ、内面はナデ、外面はナデ後にヘラで線刻を施している。内面は自然釉が観察される。

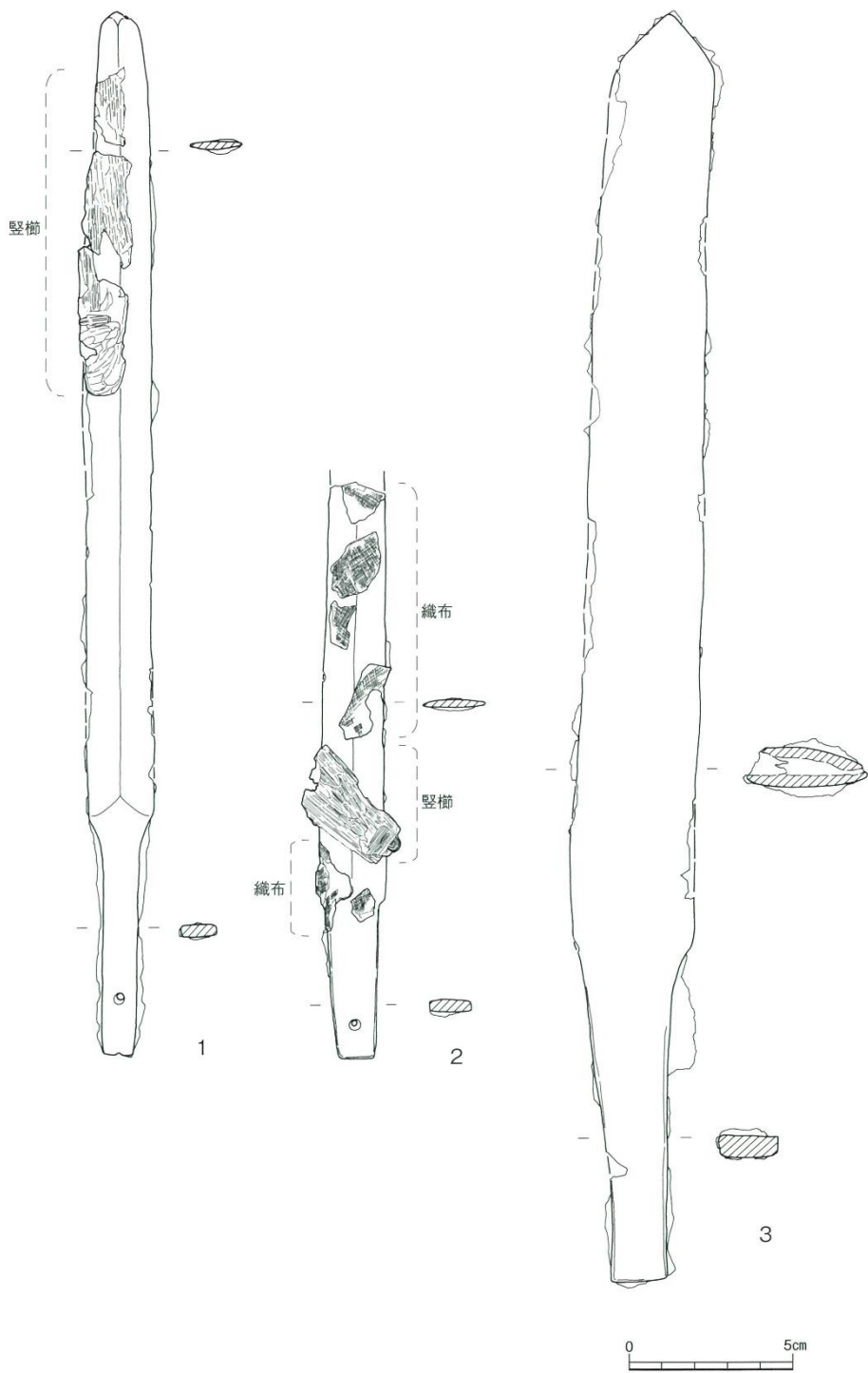
(3) 鉄器 (第15・16図, 図版17, 巻頭図版2)

1は剣である。第1主体棺内南東の壁際に、埋葬人骨の頭位と同じ方向へ鋒を向けて副葬されていた。全長31.8cm, 身部は長さ24.4cm, 最大幅2.1cm, 厚さ2mm前後, 茎部は長さ7.4cm, 最大幅1.2cm, 厚さ4mmである。身部は鋒付近から脊に稜が観察され、関はナデ関である。茎部は一定した幅, 厚みで、目釘孔が1箇所に認められる。断面形は身部で扁平楕円形, 茎部で長方形となる。身部鋒側には、縦櫛が剣本体と平行するように、鋒側に朱塗りの櫛歯部, 茎側に黒漆塗りの頭部を向けて付着している。

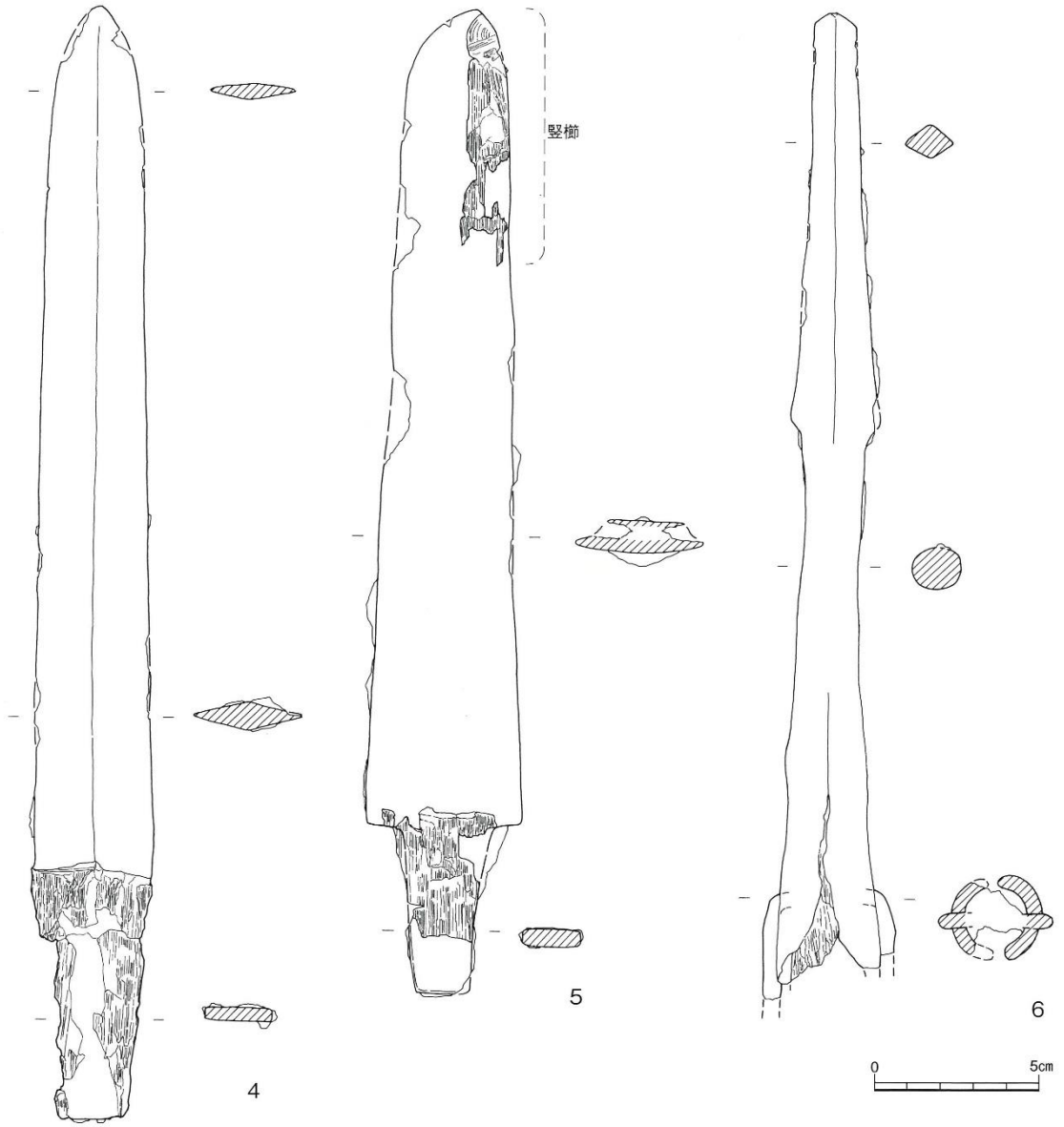
2～6は、すべて第2主体棺外から出土した。2・5・6は棺外北西側に、先端部をおそらく頭位と同じ方向に向けて、まとめて副葬されていた。このうち、後述するように2・5には2点以上の縦櫛が付着しており、同時に副葬されたものと考えられる。また、3・4は棺外東側に、3は頭位と逆方向、4は頭位と同方向にそれぞれ鋒を向けて副葬されていた。

2は剣である。身部鋒側を欠損するが、残存長17.6cm, 身部は最大幅2cm, 厚さ2.5mm前後, 茎部は長さ4.8cm, 最大幅1.5cm, 厚さ4mm程である。身部は1同様に、脊に稜をもつ。関は、微弱ながら角をもつ。茎部は目釘孔が1箇所に観察される。身部の茎側に、剣本体と斜行するように縦櫛が付着しているほか、身部各所に織布が付着している。副葬に際し、剣を織布で包んだ可能性がある。一部に織布の端部が認められ、経糸、緯糸の判別が可能である。平織で、糸の細さと糸に撚りが見られないことから、絹織物と推定される。

3は剣である。全長34.7cm, 身部は長さ24.7cm, 最大幅3.7cm, 厚さは錆化により爆せているが、7mm程と考えられる。茎部は長さ10.0cm, 幅は身部付近で3cm, 基部付近で1.7cm, 厚さは7mmである。身部は鋒付近で角がつき、関部まで幅は一定する。関部はナデ関で、徐々に幅を減じるように緩やかに茎部と接続する。断面形は身部で凸レンズ状, 茎部でやや上辺が長い台形状を呈する。



第15図 牛塚1号墳副葬鉄器①(S=1/2)



第16图 牛塚1号墳副葬鉄器②(S=1/2)

茎部に目釘孔は認められない。

4は槍あるいは剣である。全長34.1cm、身部は長さ27.1cm程、最大幅3.6cm、厚さは鋒付近で5mm、基部付近で9mmである。茎部は長さ7cm程、最大幅2.1cm程、厚さ4mmである。鋒から身部にかけては稜をもたずにつながり、関部まで幅は一定する。関部から茎部への接続は、木質に覆われ不明である。断面形は、身部鋒付近では脊の稜が緩い形状だが、基部付近では明瞭な菱形となり、茎部は長方形を呈する。茎部付近では木質が遺存しており、本体と平行方向に走る木材の目が観察される。

5は槍あるいは剣である。全長30.1cm、身部は長さ24.9cm、最大幅4.6cm、厚さは錆化により爆ぜているが、4mm程と考えられる。茎部は長さ5.2cm、最大幅2.6cm程、厚さ6mmである。鋒から身部にかけては稜をもたずにつながるが、徐々に幅を増し、角関の関部につながる。断面形は身部で凸レンズ状、茎部で長方形を呈する。茎部付近では木質が遺存しており、本体と平行方向に走る木材の目が観察される。また、身部鋒付近の表裏に漆塗堅櫛の付着が認められる。頭部は幅狭で小さく、櫛歯部は長い。表面には本体と平行するように、裏面では斜行するように付着しており、両者は別個体であると考えられる。

6は鉞である。全長30.2cm、身部は長さ13.1cm、推定最大幅2.7cm、厚さ1cm前後、袋部は長さ16.6cm、最大幅3.2cm、厚さ2.5cmである。身部は幅狭で扁平というよりは厚みをもち、関は明瞭だが突出は弱い。身部は袋部よりも短くなる。袋部下端には目釘が観察される。残存する木柄を貫通するの否かは不明だが、目釘孔のすぐ外でほぼ直角に折れ曲がり、下方へ伸びている。断面形は、身部先端付近で菱形、袋部は身部付近で楕円形となる。袋部下端には山形抉りが入る。

(4) 貝釧 (第17図、巻頭図版1)

第2主体棺内で検出された人骨の両腕に装着されていた。詳細は23頁にある西野氏の別稿を参照されたい。

遺物の時期

墳頂に据えられた円筒埴輪については、器面は内面がナデかハケ、外面はB種ヨコハケかC種ヨコハケで調整している。基底部調整がみられる個体はなく、基底部までC種ヨコハケが及んでいる個体がある。突帯は明瞭な台形で、透孔は円形のみである。焼成はすべて無黒班で、埴質を基本に、須恵質のものが少量含まれるが、埴質のうち、硬質のものは少ない。以上の諸特徴からこれらの円筒埴輪は川西編年IV群に相当する特徴を備えていることがわかるが、突帯が低くなるもの、不整形になるものはなく、外面二次調整を省略するものは少ないことは、IV群でも古手の特徴と考えることができる(川西1978)。

副葬品としては、鉄器のうち、第2主体出土の鉄鉞6は、諸特徴から高田分類I b類に該当するもので、この類の鉄鉞は、他の出土古墳の年代等からみて5世紀前半を中心に副葬されることが指摘されている(高田2014)。第2主体出土のゴホウラ背面貝釧はいわゆる広田下層型とされるものである。縁には列点文が施されており、こうしたゴホウラ背面貝釧は、主に5世紀前半代に流通することが知られる(中村2013)。第1主体では鉄剣1とそれに付着した堅櫛があるのみで、時期の決め手に欠けるが、第2主体でも見られた遺物であり、両者の埋葬時期をそれほど離して考える必要はないと考える。

第2主体、墳頂部の遺物、そしておそらく第1主体についても5世紀前半代に収まる特徴を有して

おり、古墳築造の契機となった第1主体の掘削、埋葬から墳丘構築・埴輪樹立の完了まで、比較的短期間で行われたと考えられる。

参考文献

川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

高田貫太 2014 「4 鉄銚の編年と系譜」『古墳時代の日朝関係 -新羅・百済・大加耶と倭の交渉史-』吉川弘文館

中村 浩 2001 『和泉陶器窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

中村友昭 2013 「古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面釧の流通について」『ナガラ原東貝塚の研究5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島』熊本大学文学部木下研究室

山田邦和 2011 「須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学Ⅰ 同成社

永山卯三郎 1937 「第十四章 古墳」『吉備郡史』巻上 岡山県吉備郡教育会

岡山県総社市久代牛塚1号墳出土貝釦について

矢掛町教育委員会 西野 望

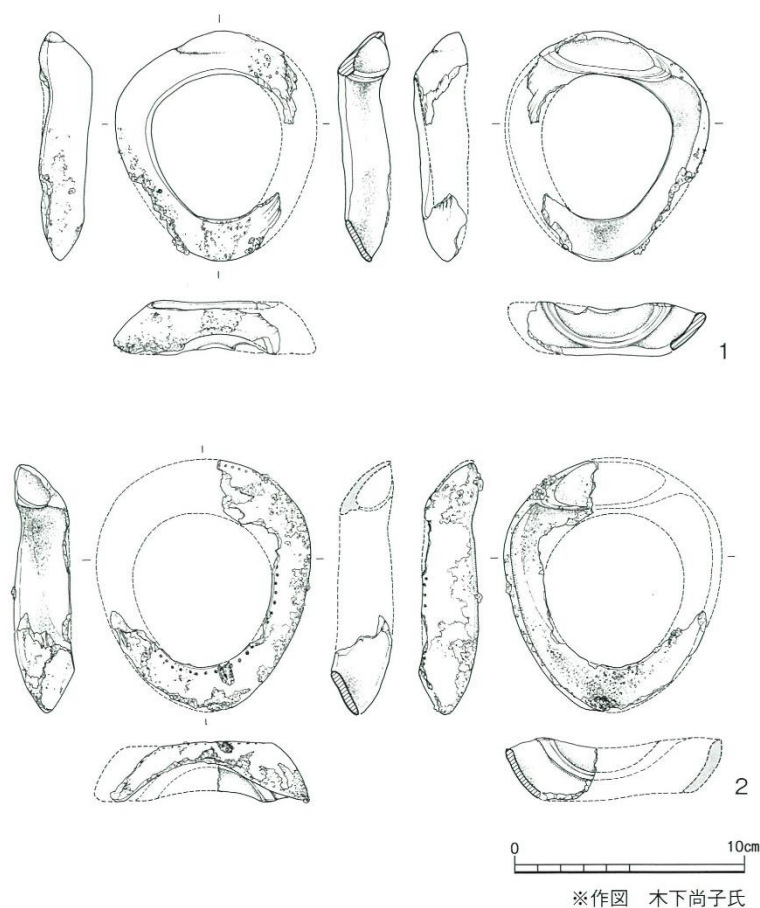
(1) 牛塚1号墳の概要

牛塚1号墳は岡山県総社市久代に所在した、径22mの円墳である。高梁川の支流、新本川の南にある低丘陵の頂上部に位置する古墳群のうちの1基である。牛塚1号墳は2つの埋葬主体を持ち、いずれも箱式石棺で、第2主体部には人骨が残されていた。主な出土遺物には円筒埴輪、家形埴輪のほか、第2主体部の副葬品として鉄製の剣2点、鉾1点、槍2点、笠2点以上が検出されている。残されていた人骨は成人男性で、両腕に1点ずつ貝釦を装着していた。

(2) 牛塚1号墳出土の貝釦

出土した貝釦は2点で、いずれも種子島以南の熱帯太平洋に分布する大型巻貝のひとつゴホウラ *Tricornis latissimus*⁽¹⁾の背面を使用したもので、いわゆる広田下層型⁽²⁾に分類されるものである。

右腕装着貝釦(第17図1)はゴホウラ背面を使用した腕輪で、表面は風化により不明瞭だが、本



第17図 牛塚1号墳出土貝釦(S=1/3)

来は全体がよく研磨され、ゴホウラの自然面は残されていないと思われる。腕輪の約4分の1を欠損するが、全体の形状を推定でき、長径10cm、短径（推定）8.9cmである。内孔は長径6.3cm、短径（推定）5.4cmで、厚みは3～4mm、現存部分の重さは37.0gである。

左腕着装貝釧（第17図2）もゴホウラ背面を使用した腕輪で、1と同様に表面は風化により不明瞭だが、本来は全体的によく研磨が施されていたと考えられる。1との違いは、表面の外周と内孔の周囲に径1.1mm～1.5mmの列点文を刻むことである。表面の風化や付着物により、部分的にしか列点文を確認することはできなかったが、列点文は外周、内周をめぐるものと推測される。腕輪の大きさは全体の約3分の1を欠損するが、長径（推定）11cm、短径（推定）9.3cmである。内孔は長径（推定）6.6cm、短径（推定）6cmで、厚みは3～4.5mm、現存部分の重さは32.2gである。

1・2のいずれもゴホウラの背面を使用する際、内面において次体層の一部がかかるが、ゴホウラの特徴である一大結節や上唇、外唇を取り除き、貝の厚みを3～4mm程度になるまで丁寧に研磨し、全体の形状を楕円形に整えている。

第1表 牛塚1号墳貝釧出土状況ならびに共伴遺物

出土状況	成人男性	両腕着装（左腕1点 列点文あり・右腕1点）	人骨頭部付近に朱を散布
共伴遺物	箱式石棺第2主体	鉄製品（剣2点 鉾1点 槍2点）、	竪櫛2点以上
	墳丘	円筒埴輪、	家形埴輪

（3）小結 - 広田下層型貝釧と列点文の系譜 -

琉球列島産の大型巻貝は弥生時代以来、それぞれの時代に応じて九州や四国、本州そして韓半島の有力者のもとへもたらされ、珍重された。ゴホウラはその代表的な素材の一つである。その交易ルートは「貝の道」⁽³⁾として先学の研究成果が数多く報告されている。さて、古墳時代の琉球列島産巻貝の腕輪は弥生時代に比較すると出土数は少ないが、一定の消費量を保ち、貝交易の継続性が指摘されている（木下1996）。その中のひとつであるゴホウラ背面使用の広田下層型貝釧は、本遺跡出土の2点のほか、鹿児島県広田遺跡（下層）から出土する125点を最多とし、大分県臼杵市臼塚古墳1点、大分市世利門古墳1点、愛媛県松山市平山古墳1点、岡山県総社市緑山古墳1点、兵庫県たつの市新宮東山2号墳1点、長野県須坂市八丁鎧塚1号墳3～4点の8遺跡から出土している。種子島広田遺跡から九州北東部沿岸、瀬戸内海を東進し、中部地方に至る分布状況は、中村友昭氏によって、「広田遺跡を起点とした消費地間の流通経路」の想定ができると指摘されており、本遺跡も流通経路のひとつに位置づけられる。また、中村氏は広田下層型貝釧の編年的位置づけについて古墳時代前期末から中期前半（4世紀後半から5世紀前半）に比定している（中村2013）。

ここで、古墳時代のゴホウラ背面利用の腕輪には広田下層型貝釧のほか「繁根本型貝釧」⁽⁴⁾の型式も存在する。中村氏は繁根本型貝釧について13遺跡17例⁽⁵⁾を紹介しながら、その分布状況の「ほとんどが九州島に集中しており、広田下層型貝釧の分布とは重複しない」としている（中村2013）。さらにこれについては編年的位置づけとして古墳時代中期後半から後期前葉（5世紀後半から6世紀前葉）に比定している。また、繁根本型貝釧は木村幾多郎氏によって、a類とb類に細分されている⁽⁶⁾（木村1980）。木下尚子氏は熊本県玉名市伝左山古墳出土貝釧を中心に繁根本型貝釧の再検討をした際に、a類とb類の違いのひとつは存在する主要な時期差であると指摘する（木下2014）。つまり、出土状

況から a 類が 5 世紀後半から 6 世紀前半に属し、b 類が 5 世紀後半に多いことを述べたうえで、「二つは 5 世紀後半で重なりながら b 類が古く、a 類が新しい」としている。さらに鹿児島県広田遺跡出土の貝釧の形態を分類整理し、この「繁根木型貝釧 b 類は広田遺跡のゴホウラ腕輪と密接に関わって登場した」と推定している。

さて、本遺跡出土の貝釧のうち左腕に装着されていた貝釧に列点文が確認できた。ここで列点文に着目して資料の整理を行いたいと思う。列点文が施された資料は広田下層型貝釧では本遺跡のほか、鹿児島県南種子町広田遺跡、大分県大分市世利門古墳、兵庫県たつの市新宮東山 2 号墳の 4 例、繁根木型貝釧では熊本県玉名市伝左山古墳 1 例に認められる（第 2 表）。鹿児島県南種子町広田遺跡では貝釧に列点文を施すのはゴホウラ釧 2 点とイモガイ釧 1 点であるが、龍佩型貝製垂飾やマクラガイ珠等に列点文を施す例は少なくない。このような状況から列点文は広田遺跡の人々が好んで利用したものと考えられる。本州における列点文の出現は広田遺跡で列点文が利用された時期と重複している。つまり広田遺跡の文化情報が瞬時に近畿、中部地方まで伝達していたことになる。その背景として、前の時代から継続してきた貝交易が古墳時代においても活発に行われ、種子島を介して琉球列島の素材だけでなく文化等も含めた情報を消費地へと伝えていたことが想像できる。

第 2 表 古墳時代ゴホウラ製貝釧の時期比定と列点文をもつ貝釧

4 世紀後半	広田下層型	{ 広田遺跡（広田下層型：列点文あり 2 点含む） 新宮東山 2 号墳（広田下層型：列点文あり）
5 世紀前半		
		{ 牛塚 1 号墳（広田下層型：2 点のうち 1 点に列点文あり） 八丁鎧塚 1 号墳（広田下層型、共伴のスジガイ釧に列点文あり）
5 世紀後半	繁根木型 b 類	{ 世利門古墳（広田下層型：列点文あり） 伝左山古墳（繁根木型 b 類 2 点のうち 1 点に列点文あり）
6 世紀前半		
	繁根木型 a 類	

（*中村友昭氏 2013、木下尚子氏 2014 の研究成果をもとに作成）

（4）おわりに

本遺跡の被葬者が琉球列島と関わりの中で希少な貝釧を入手できたのは、瀬戸内海沿岸が古墳時代貝交易のルート上にあったからにはほかならない。列点文の系譜の追及には、ゴホウラ製貝釧だけでなく、他の琉球列島産貝製品の分布状況や共伴遺物との検討などを総合的に考慮し導き出す必要があると考える。また、木下氏の研究成果から繁根木型貝釧を細分した際に時期差があること、大型化していくことが指摘されている（木下 2014）。広田遺跡出土のゴホウラ製腕輪についても細分化が検討されている（木下 2003）のと同様に、列点文を施す貝釧の出土状況から広田下層型と繁根木型 b 類にも何らかの関連があるように思える。今後の課題としたい。

本稿を作成するにあたり、作図を木下尚子氏が担当して下さったとともに、多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

(註)

(1) ゴホウラ *Tricornis latissimus* はスイシヨウガイ科の巻貝で、種子島以南のサンゴ礁に棲息する大型の巻貝である。殻は厚くて堅固。体層はよく発達し、滑らかである。外唇は袖状に張り出す。軟体部は筋肉質で足はよく発達する。この強力な足と丈夫な蓋をつかって、重い殻を引きずって海底を移動する。主に植物（藻類）を食べる。

(2) 広田下層型とは、鹿児島県南種子町広田遺跡から出土するゴホウラの背面を利用した腕輪のうち、入念に研磨を施し、縦長の楕円形に形を整えたものをいう。主に下層から出土するためこの名称が使われている。さて、広田遺跡は砂丘に立地する埋葬遺跡で、153体の人骨が出土し、大量の貝製装身具が伴って検出されている。広田遺跡から出土する多くの貝製品中、下層から出土したゴホウラ製腕輪は125点であり、うち2点には列点文を有するものがある。一つはE3号人骨（成人女性か？）で、両腕に4点ずつゴホウラ製腕輪を着装し、そのうちの1点に列点文が施されている。また、同人骨には列点文と側面に彫刻の施されたイモガイ製腕輪1点も共伴している。もう一つも成人女性（EX地区2号人骨）で、右腕に7点着装されていた腕輪のうち1点に列点文が施されている。広田遺跡からは貝種を問わなければ462点の腕輪が出土しているが列点文を有するのはこの3点のみである。

(3) 「貝の道」とは三島格氏によって命名された、琉球列島産貝類の交易ルートのことである。

(4) 繁根木型貝釧は熊本県玉名市伝左山古墳出土の貝釧について、1977年に永井昌文氏によって命名された。木村幾多郎氏は形態的特徴としてゴホウラの螺塔部を取り入れていること。前溝方向への伸長が大きいこと等を指摘している（木村1980）。

(5) この報文後に発表された木下尚子氏の研究では繁根木型貝釧は15遺跡19例となっている。

(6) 木村氏は繁根木型貝釧を次のように細分している。

a類：殻頂部まで取り入れられたもの。

b類：螺塔の次体層・螺層の一部を取り入れたもので、全体に丸みをおび、所謂広田に似るが前溝側へのびる。

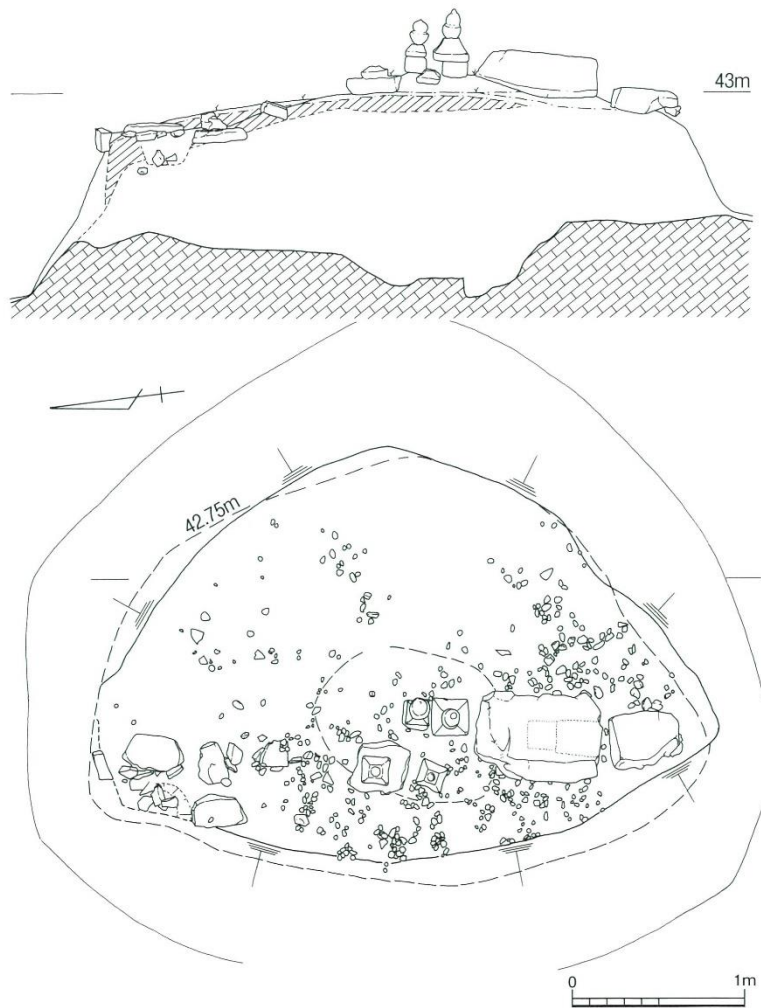
参考文献

- 木下尚子 1996「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』第81巻第1号 日本考古学会
2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島 広田遺跡』
2014「繁根木型貝釧考—伝左山古墳出土貝釧の紹介と繁根木型貝釧の成立—」『考古学雑誌』第98巻第4号 日本考古学会
- 木村幾多郎 1980「所謂広田型貝輪の細分について」『史淵』第117号 九州大学文学部
- 吉良哲明 1954『原色日本貝類図鑑』保育社
- 白井祥平 1997『貝Ⅱ』ものと人間の文化史83-II 法政大学出版局
- 谷山雅彦 2001「(仮称)岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報10(平成11年度)』総社市教育委員会
- 中村友昭 2013「古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面釧の流通について」『ナガラ原東貝塚の研究—5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島—』熊本大学文学部
- 広田遺跡学術調査研究会編 2003『種子島 広田遺跡』
- 前角和夫 2001「岡山納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報11(平成12年度)』総社市教育委員会

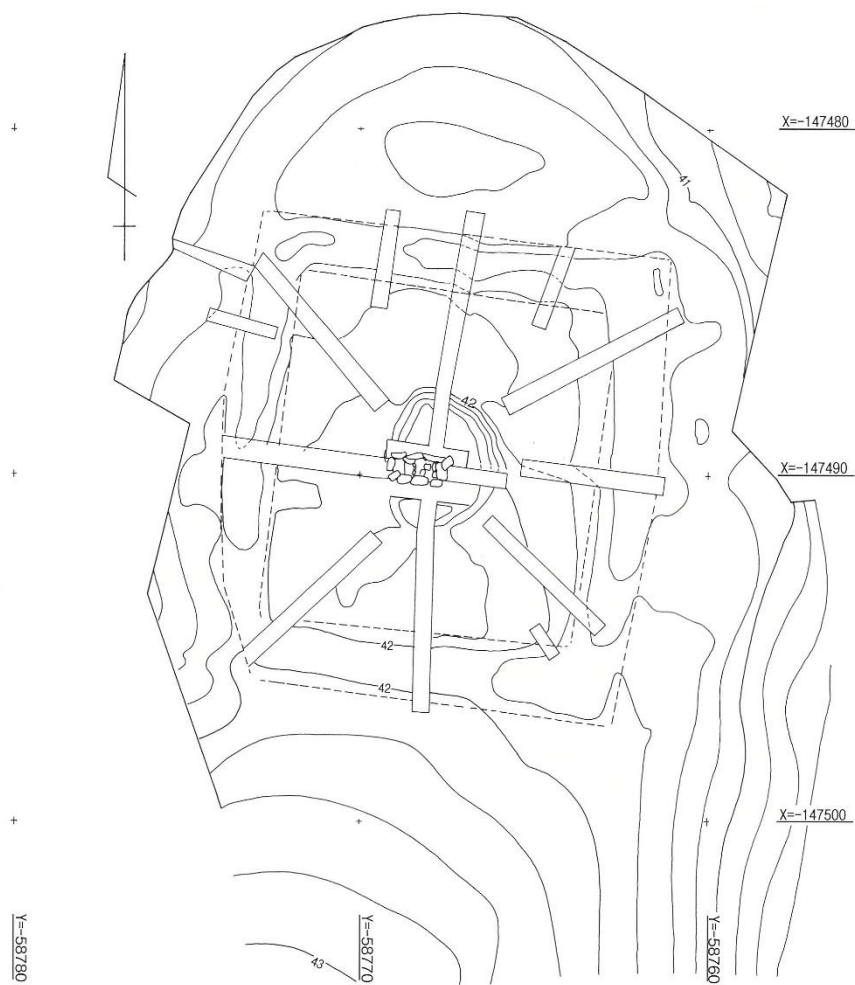
第2節 牛塚2号墳

墳 丘（第18・19図，図版10～12）

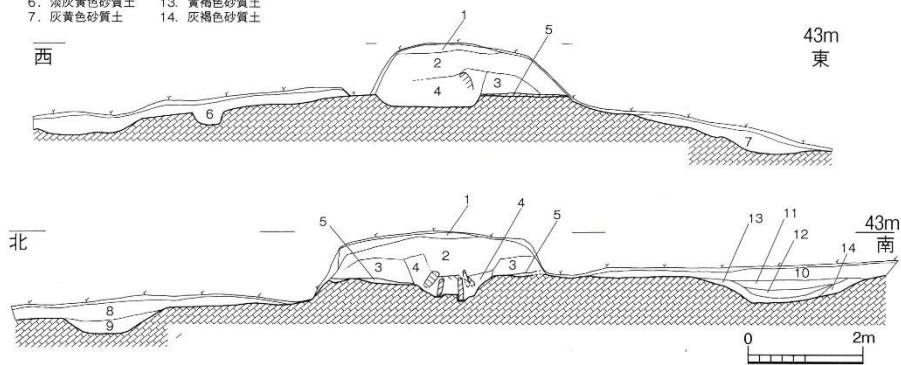
1号墳の北約25m，同一丘陵尾根の先端部に位置する。墳丘は大きく削平されており，中央部の残丘上には，中世五輪塔とその台座として用いられたであろう板石が据えられていた。また，周囲には大小の礫が散乱していたが，これも五輪塔に伴う可能性がある。五輪塔は空風輪2个体分，火輪4个体分，地輪2个体分があり，水輪を欠く。石材はすべて白色軽石系石材であり，厳密なセット関係は不明だが，少なくとも4个体は据えられたものと考えられる。空風輪は一体型で境の稜は緩い。火輪も幅12～20cm程の比較的小型のもので，四隅の開きは小さい。



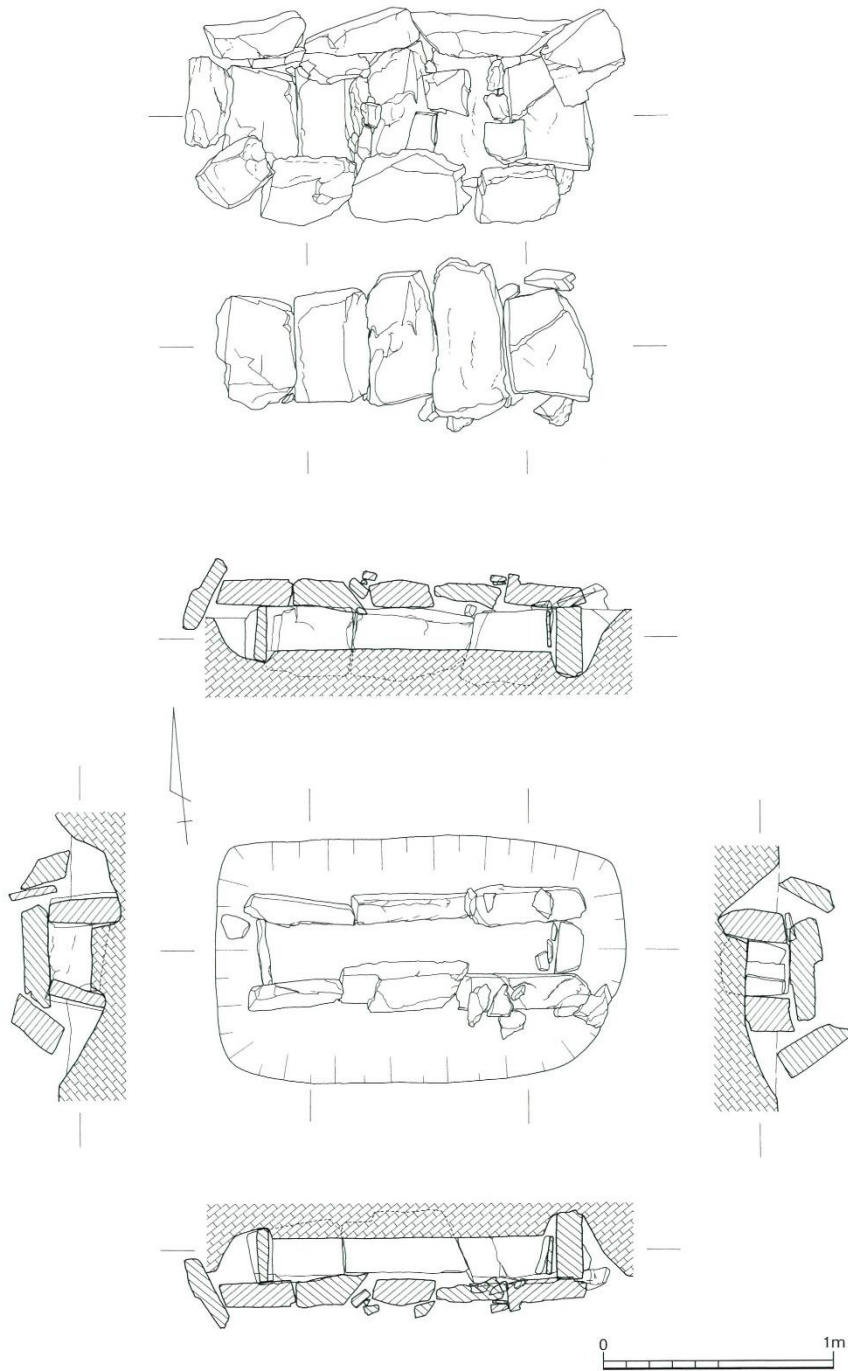
第18図 牛塚2号墳中世五輪塔実測図(S=1/40)



- | | |
|------------|------------|
| 1. 礫層 | 8. 灰白色砂質土 |
| 2. 褐色砂質土 | 9. 灰白色砂質土 |
| 3. 褐色砂質土 | 10. 灰白色砂質土 |
| 4. 灰黄色砂質土 | 11. 黄色砂質土 |
| 5. 黑色砂質土 | 12. 黑色砂質土 |
| 6. 淡灰黄色砂質土 | 13. 黄褐色砂質土 |
| 7. 灰黄色砂質土 | 14. 灰褐色砂質土 |



第19図 牛塚2号墳墳丘測量図・断面図(測量図はS=1/200, 断面図はS=1/120)



第20図 牛塚2号墳主体部実測図(S=1/30)

2号墳は、周溝の検出により、1辺9.5m前後の方墳であることがわかった。周溝は地山を切り込んで成形されており、特に尾根筋に直交する南北の溝は、掘形が明瞭に表れていた。葺石に用いたであろう石材は看取されなかった。地山上に一層盛土を施し、その上から墓壙を掘り込んだ後、墓壙中に石棺1基が設けられ、その後に封土、墳丘盛土が施されたものと考えられる。墳形は異なるが、1号墳と墳丘構築法は類似している。墳丘の調査で須恵器と埴輪細片が出土しており、墳頂部祭祀に用いられた可能性がある。

埋葬施設（第20図、図版11・12）

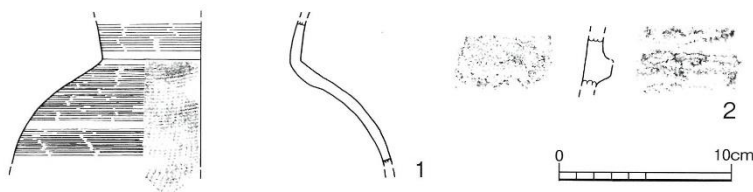
墳丘の中央部に石棺1基が、東西方向に主軸を向けて検出された。石棺は、地山上層の盛土上から掘り込まれた、長さ1.7m、幅1m前後の墓壙内に設けられていた。床面レベルは地山に達しており、部分的に掘り窪めて側板と小口板を据え、裏込め土を施していた。埋葬・副葬行為の後には、蓋石が置かれ、両外側に割石、上面の石の継ぎ目に礫を置いて密閉しており、粘土は用いていない。

蓋石には長さ50～80cm、幅30cm前後の割石5個を用いており、両外側にはそれと同規模か、やや小さい石を使用している。上面の礫は10cm以下から20cm前後の大きさである。石棺規模は内法で長さ1.2m、幅20～30cm程の狭いもので、小児埋葬の可能性はある。小口には長さ20cm～30cm、幅25cm前後、厚さ6～10cm程の石材を、側板には長さ40～50cm、幅25cm前後、厚さ6～10cm程の石材をそれぞれ用いている。なお、棺内外において人骨・副葬品は出土していない。

出土遺物（第21図、図版16-2）

2号墳出土の遺物は少なく、2点を図化できたのみである。1は南周溝から出土した須恵器の壺である。頸部から胴部にかけて残存し、残存高8.3cm、頸部径11.4cmである。頸部は外面がカキ目、内面が回転ナデによって整えられる。胴部は外面が平行タタキの後カキ目を施しており、内面は当て具痕が観察されず、磨り消していると考えられる。2も南周溝から出土した円筒埴輪で、突帯部分のみ残存する。風化が著しく、調整は不明だが、突帯は明瞭な台形で、端面は凹まない。

須恵器壺については、限定は難しいが初期須恵器の範疇には無く、円筒埴輪は小片だが、1号墳の埴輪に比べ突帯の突出度が若干弱い。1号墳よりも後出し、5世紀中頃から後半頃の築造を考えておきたい。

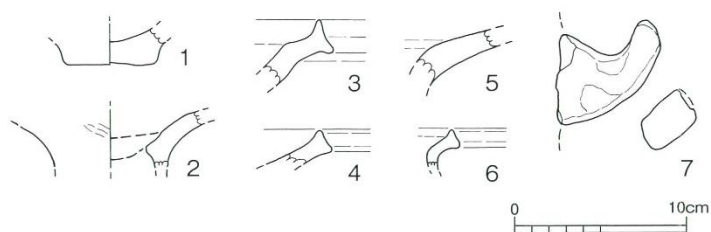


第21図 牛塚2号墳出土遺物(S=1/4)

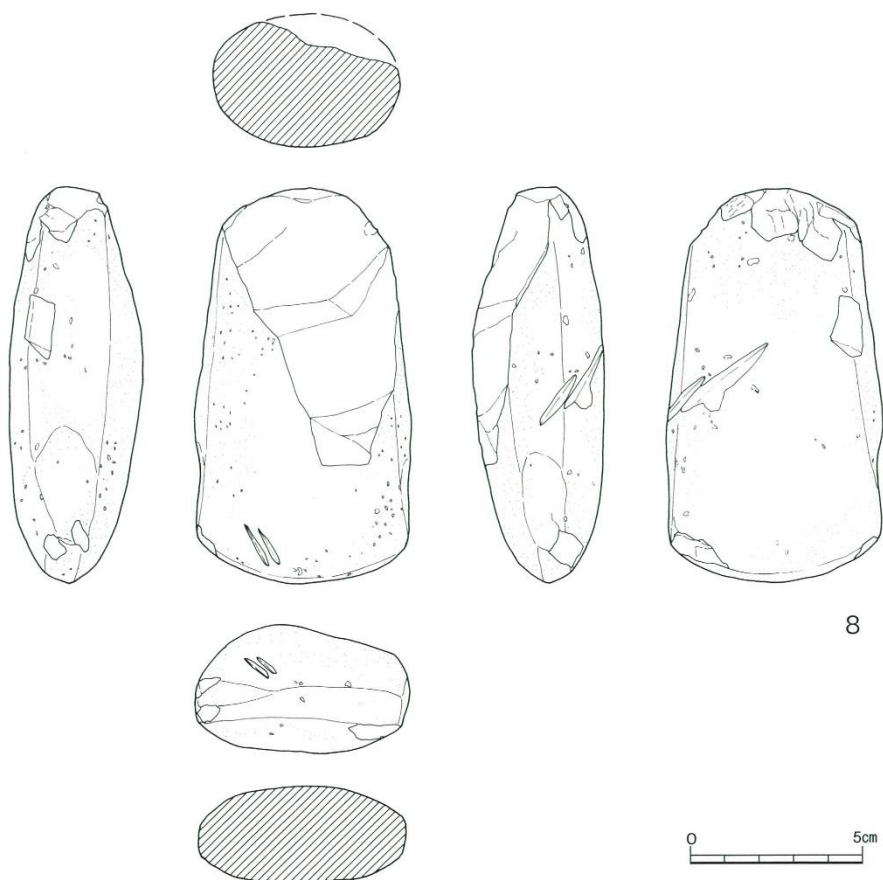
第3節 古墳に伴わない遺物 (第22・23図, 図版16-3)

1～8は墳丘各所で出土した遺物であり, 時期・性格上, 古墳に伴わないと判断されるものである。周辺の集落からの混入, あるいは墳丘盛土内に混入していたと考えられる。

1～6は弥生土器である。1は壺の底部で, 底径5.2cmである。黒褐色の胎土で, 下方へ張り出し, 底面が若干凹む。内面にヘラケズリも認められず, 前期～中期前葉頃のものと考えられる。2は高杯



第22図 古墳に伴わない遺物①(S=1/4)



第23図 古墳に伴わない遺物②(S=1/2)

で、杯部と脚柱部の接合部である。橙色の緻密な胎土である。杯部外面にはヘラミガキ、脚柱部内面にはヘラケズリが施されるほか、粘土円板の剥落痕も観察されることから、連続成形に伴う粘土円板充填により製作されていることがわかる。後期前半頃のものと考えられる。3～6は甕・壺の口縁部である。すべて細片で、内外にヨコナデが観察される。5は外面に赤色顔料が塗られている。いずれも時期は後期と考えられる。7は甑の取手である。手づくねで成形され、穿孔はなく、断面は隅丸長方形である。古墳時代中期のものと考えられる。8は蛤刃石斧である。安山岩系石材を用いており、刃部先端には稜が二条研ぎ出され、両側面には弱い抉りが認められる。弥生時代前半期のものと考えられる。また、図化していないが9・10は鉄滓で、周辺の製鉄遺跡のものと考えられる。

第4章 総括

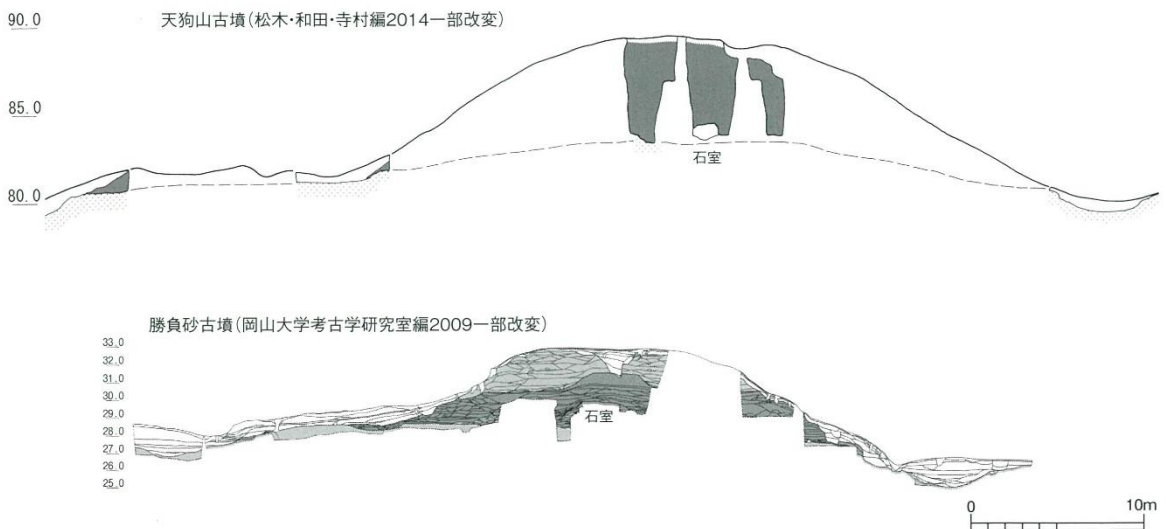
今回は、径22mの円墳である牛塚1号墳、一辺9.5mの方墳である牛塚2号墳について報告した。1号墳は5世紀前半に、2号墳は1号墳にやや遅れて築造されたと考えられる。ここでは、特に多くの情報が得られた1号墳について評価を行い、まとめとしたい。

牛塚1号墳は5世紀前半に築かれた、径22m、葺石がなく、段築を設けない円墳である。墳頂部には円筒埴輪列がめぐらされ、中央部には家形埴輪が据えられていた。須恵器も墳丘上に供えられたようである。第1主体の被葬者は鉄剣、竪櫛を、第2主体の被葬者は剣・槍・鉾の鉄器類のほか、竪櫛、南海産貝釧という一般的でない副葬品を備えており、追葬された第2主体の方がより豊富な副葬品をもっていたことが注目される。

竪櫛は、総社市内では他に小造山西3号墳でのみ出土が知られる(武田2004)。貝釧は、岡山県内の古墳では備前市新庄天神山古墳、瀬戸内市牛文茶臼山古墳で出土しており(西川1986a・1986b)、総社市緑山古墳群でもゴホウラ製貝釧が表採されたという。牛塚1号墳の築造された5世紀前半頃は、吉備中枢における造山古墳の阿蘇溶結凝灰岩製石棺、千足古墳の直弧文入り石障と肥後型横穴式石室などの例があるように、古墳に吉備と九州の繋がりが顕著にみられる時期でもある。貝釧についても、瀬戸内海を通じて活発化する九州との政治的あるいは日常的な交流の中で入手されたものであろう。

こうした遺物相とは別に特筆されるのは、埋葬施設(第1主体)を地山直上に築き、その後に薄い単位の盛土が2m近く施されるという墳丘構築法である。この墳丘構築法は、牛塚1号墳から比較的近い小田川下流域の大型帆立貝形古墳、勝負砂古墳と天狗山古墳でも確認されていたものである。「墳丘後行型」と呼ばれる墳丘構築類型にあてはまり(吉井2002)、墳丘の遺存状況は良くないが牛塚2号墳もその可能性がある。

重要なことは、この墳丘構築法が朝鮮半島の墓制と強く関連付けられていることである(吉井



第24図 墳丘後行型古墳の例(S=1/400)

2002, 松木 2009, 高田 2014)。実際, 上記の勝負砂古墳と天狗山古墳では, 竪穴式石室, 出土遺物に多くの朝鮮半島系要素が窺われ, 古墳時代中期, 瀬戸内海交通を基に倭と朝鮮半島の対外交渉を担った被葬者像と, それを支える「小田川下流域集団」が想定されている(高田 2014)。埋葬と盛土施行の順序のみでいえば, ここでいう墳丘後行型と似る構築法は, 日本列島の中小古墳に通時的かつ一般的にみられる。それは概ね, 地山成形で低墳丘の大部分を形成し, 薄い墳丘封土を施すというもので, 構築法として簡単であるがゆえに広く普及し, 「在地的・伝統的」で階層の低い古墳に採用されるといわれる(掘込墓壙 c 類: 和田 1989)。しかし, 勝負砂古墳等でみられる墳丘後行型の構築法は, その系譜を朝鮮半島の墳墓祭祀に追うことが適切である点で, 掘込墓壙 c 類とは, 似て非なるものといえる。

牛塚 1 号墳そのものに関しては, 出土遺物ほかの属性に朝鮮半島の影響を積極的に認めることは難しい。ただし, やや時期は遅れるものの上記の小田川下流域の二古墳や, 新本川流域の金子 2 号墳や狩谷古墳群周辺で渡来系要素が窺われることから, 牛塚 1 号墳の被葬者が, 地理的に近接する当該地域と, あるいはそれらと同じ系譜をもつ地域勢力と交流していたことは十分想定できる。そうした文脈から捉えれば, 牛塚 1 号墳にみられる墳丘後行型の墳丘構築法も, 同じ流れの中でもたらされた朝鮮半島系の要素と考えることが可能である。被葬者の出自までは現段階ではわからないが, 牛塚古墳群は, 渡来系要素としての「墳丘後行型」墳丘構築法を採用した中小古墳の好例ということができ, 吉備の古墳時代墓制, 特に中小古墳の研究に石室や副葬品・副葬習俗以外の見方を示す重要な調査例といえる。

参考文献

- 岡山大学考古学研究室編 2009『勝負砂古墳 調査概報』学生社
西川 宏 1986a「93 新庄天神山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
西川 宏 1986b「97 牛文茶白山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
高田貫太 2014「第 4 章 地域集団による対朝鮮半島交渉の様態」『古墳時代の日朝関係 - 新羅・百済・大加耶と倭の交渉史 -』吉川弘文館
武田恭彰 2004『小山ヶ谷古墳 小造山古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 17 総社市教育委員会
松木武彦 2009「7 まとめ」『勝負砂古墳調査概報』学生社
松木武彦・和田 剛・寺村裕史編 2014『天狗山古墳』岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団
吉井秀夫 2002「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第 49 巻第 3 号 考古学研究会
和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元 6 講談社

第3表 遺物一覧

牛塚1号墳

No.	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	埴輪	朝顔形 (口縁部)					外タテハケ、内ナナメ ハケ		7.5YR8/6 (浅黄橙)	径0.5mmの長石
2	埴輪	朝顔形 (口縁部)					外タテハケ、内ナナメ ハケ		7.5YR8/6 (浅黄橙)	径0.5mmの長石
3	埴輪	円筒 (口縁部)					外タテハケ、内ヨコナ デ		10YR8/4 (浅黄橙)	径0.5mmの長石微量
4	埴輪	円筒 (口縁部)					外タテハケ、内ヨコハ ケ		7.5YR8/8 (黄橙)	径0.2mmの長石
5	埴輪	円筒 (口縁部)					内外ナデ		5YR6/6 (橙)	径1.5mmの石英
6	埴輪	円筒? (口縁部)					外タテハケ、内ヨコハ ケ		10YR6/4 (黄橙)	径0.5mmの長石
7	埴輪	円筒 (口縁部)					外ナナメハケ・ナデ、 内風化		7.5YR6/4 (にぶい橙)	径0.5mmの長石
8	埴輪	円筒 (口縁部)					内外ナナメハケ・ヨコ ハケ	断面黒色	7.5YR7/6 (橙)	径0.2～0.5mmの石英・長石
9	埴輪	円筒 (口縁部)					外ナナメハケ、内ナデ	須恵質	10YR6/4 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石・黒色鉱物
10	埴輪	円筒 (口縁部)					外タテハケ、内ヨコハ ケ	10～12は同一個体	10YR7/4 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石
11	埴輪	円筒		29.8			内外ナデ	10～12は同一個体	7.5YR7/4 (にぶい橙)	径0.2mmの石英・長石
12	埴輪	円筒 (基底部)					内外ナデ	10～12は同一個体	10YR6/3 (にぶい黄橙)	径1.0mmの石英・長石
13	埴輪	朝顔形 (口縁部)					外ナデ、内ナナメハケ		5YR6/6 (橙)	径0.5mmの長石
14	埴輪	円筒		22.0			外B種ヨコハケ、内ナ デ	円形透孔	7.5YR8/6 (浅黄橙)	径0.5mmの長石
15	埴輪	円筒					外タテハケ、内ナナメ ハケ		5YR5/8 (明赤褐)	径0.5～1.0mmの石英・長石
16	埴輪	円筒					内外ナデ		10YR5/3 (にぶい黄褐)	径0.5～1.0mmの長石
17	埴輪	円筒					外タテハケ、内ナデ	円形透孔	10YR7/4 (にぶい黄橙)	径0.5mmの長石
18	埴輪	円筒					外ナナメハケ・ヨコハ ケ、内ナナメハケ	須恵質	10YR6/3 (にぶい黄橙)	径0.2mmの石英・長石
19	埴輪	円筒					外C種ヨコハケ、内ナ デ		10YR6/4 (にぶい黄橙)	径1.0mmの長石
20	埴輪	円筒					内外ナデ		5YR7/6 (橙)	径0.5mmの長石
21	埴輪	円筒					外ナデ、内ヨコハケ		7.5YR7/6 (橙)	径0.2mmの長石
22	埴輪	円筒					内外ナデ	須恵質	10YR7/3 (にぶい黄橙)	径0.2mmの石英・長石・黒色鉱物
23	埴輪	円筒					外ナデ、内ナナメハケ		7.5YR8/4 (浅黄橙)	径0.2mmの長石
24	埴輪	円筒					外ヨコハケ、内ナデ		10YR6/4 (にぶい黄橙)	径0.5mmの長石
25	埴輪	円筒					内外ナナメハケ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径0.2mmの長石
26	埴輪	円筒					外ヨコハケ、内ナデ		10YR6/4 (にぶい黄橙)	径0.5mmの長石
27	埴輪	円筒					内外ナナメハケ		7.5YR7/6 (橙)	径0.2mmの長石
28	埴輪	円筒					外ナナメハケ・ヨコハ ケ、内ヨコハケ	断面黒色	5YR6/8 (橙)	径0.2mmの石英・長石
29	埴輪	円筒					外ヨコハケ・タテハ ケ、内ナナメハケ		7.5YR7/6 (橙)	径0.2mmの長石

No.	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	特徴	色調	胎土
30	埴輪	円筒					外ヨコハケ, 内ナデ	須恵質	10YR7/3 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石
31	埴輪	円筒					外ヨコハケ, 内ナデ	須恵質	10YR6/4 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石
32	埴輪	円筒					外ヨコハケ, 内ナデ		10YR7/4 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石
33	埴輪	円筒					内外ナデ		5YR7/6 (橙)	径0.5mmの長石
34	埴輪	円筒					外ヨコハケ, 内ナデ	須恵質, ヘラ記号	10YR7/4 (にぶい黄橙)	径0.2mmの長石
35	埴輪	円筒					外ヨコハケ, 内風化	ヘラ記号	10YR5/3 (にぶい黄橙)	径0.5 ~ 1.0mmの長石
36	埴輪	円筒 (基底部)					外ナデ		5YR6/6 (橙)	径0.5 ~ 1.0mmの石英・長石・赤色鉱物
37	埴輪	円筒 (基底部)					外タテハケ, 内風化		5YR6/8 (橙)	径0.5 ~ 1.0mmの石英・長石
38	埴輪	円筒 (基底部)					内ナナメハケ?		7.5YR5/3 (にぶい褐)	径0.5mmの長石
39	埴輪	円筒 (基底部)			28.8		外C種ヨコハケ, 内ヨコハケ・ナナメハケ		10YR6/4 (にぶい黄橙)	径0.5mmの石英・長石
40	埴輪	壺形? (口縁部)	18.8				内外ナデ	刺突文	7.5YR8/4 (浅黄橙)	径2.0mmの長石
41	埴輪	家形 (屋根)					外沈線・ハケ, 内ナデ		7.5YR5/4 (にぶい褐)	径0.2mmの長石
42	埴輪	家形 (屋根)					外沈線・斜線, 内ナデ		7.5YR7/6 (橙)	径0.5mmの長石
43	埴輪	家形 (復元)					外ハケ・ナデ, 内ナデ		10YR7/4 (にぶい黄橙)	径0.5 ~ 1.5mmの石英・長石・黒色鉱物
44	須恵器	甕					外格子目タタキ・ハケ, 内円弧当て具		5B7/1 (明青灰)	径0.5mmの長石
45	須恵器	甕					外平行タタキ・クシナデ, 内円弧当て具		2.5Y6/1 (黄灰)	径0.2mmの長石
46	須恵器	甕					外平行タタキ・クシナデ, 内円弧当て具	17・18 同一個体?	5Y6/1 (灰)	径0.1mmの長石
47	須恵器	甕					外平行タタキ・クシナデ, 内円弧当て具	17・18 同一個体?	5Y6/1 (灰)	径0.1mmの長石
48	須恵器	壺					内外ナデ	線刻, 自然釉	外 5Y7/1 (灰白) 内 5B5/1 (青灰)	径0.5mmの長石
No.	種別	器種	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存長 (cm)	出土位置	特徴		
1	鉄器	剣	31.8	2.1	4.0	-	第1主体棺内	目釘孔, 竖櫛付着		
2	鉄器	剣	-	2.0	4.0	17.6	第2主体棺外西側	目釘孔, 竖櫛・織布付着		
3	鉄器	剣	34.7	3.7	7.0	-	第2主体棺外東側			
4	鉄器	槍	34.1	3.6	9.0	-	第2主体棺外東側	木柄残存		
5	鉄器	槍	30.1	4.6	4.0	-	第2主体棺外西側	木柄残存, 竖櫛付着 (2点)		
6	鉄器	鉞	30.2	3.2	2.5	-	第2主体棺外西側	目釘, 木柄残存		
1	貝製品	鈿	10.0	8.9	4.0	-	第2主体人骨右腕	ゴホウラ背面製		
2	貝製品	鈿	-	9.3	4.5	11.0	第2主体人骨左腕	ゴホウラ背面製		

牛塚2号墳

No.	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	須恵器	壺	11.4 (頸部)				外平行タタキ・カキ目、内ナデ・磨消し		N4/ (灰)	径 2.0mm の石英・長石
2	埴輪	円筒					内外ナデ		10YR8/3 (浅黄橙)	径 0.5mm の石英・長石

古墳に伴わない遺物

No.	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	弥生土器	壺 (底部)			5.2		内外ナデ		10YR3/2 (黒褐)	径 1.0mm の石英・長石
2	弥生土器	高杯					外ヘラミガキ、内ヘラケズリ		5YR7/6 (橙)	径 0.5 ~ 1.0mm の長石・黒色鉱物
3	弥生土器	口縁部					内外ナデ		10YR4/2 (灰黄褐)	径 2.5mm の石英・長石
4	弥生土器	壺 (口縁部)					内外ナデ		7.5YR7/6 (橙)	径 1.0mm の石英・長石
5	弥生土器	壺 (口縁部)					内外ナデ	赤色塗彩	10YR5/8 (赤)	径 0.5mm の長石・金雲母
6	弥生土器	甕 (口縁部)					内外ナデ		10YR6/4 (にぶい黄橙)	径 1.0mm の石英・長石
7	土師器	甗 (取手)					内外ナメハケ・ヨコハケ	断面方形気味、穿孔なし	7.5YR7/6 (橙)	径 1.0 ~ 2.0mm の長石
No.	種別	器種	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存長 (cm)	特徴			
8	石器	石斧	11.2	6.4	(3.7)	-	蛤刃、安山岩系			
9	鉄滓	-	12.4	7.3	5.5	-				
10	鉄滓	-	9.6	9.2	4.6	-				

1 牛塚1号墳調査前近景
(北西から)



2 牛塚1号墳西トレンチ
(西から)



3 牛塚1号墳西側周溝
(北西から)



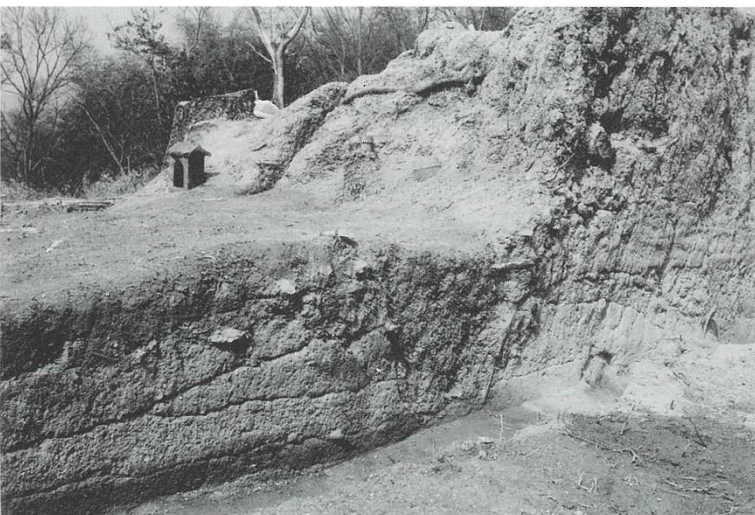
図版2



1 牛塚1号墳東トレンチ
(北東から)



2 牛塚1号墳東側周溝
(北から)



3 牛塚1号墳南トレンチ
(南東から)

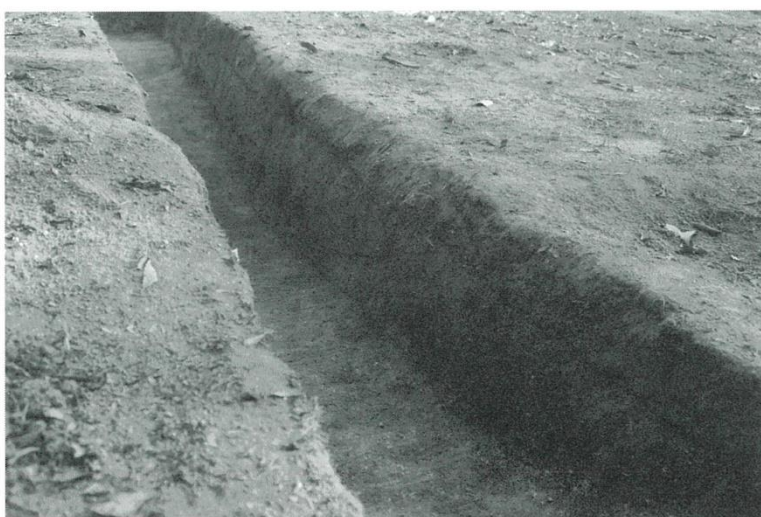
1 牛塚1号墳南側周溝
(東から)



2 牛塚1号墳北トレンチ
(北東から)



3 牛塚1号墳北側周溝
(北東から)



図版4



1 牛塚1号墳墳頂家形埴輪
出土状況(南西から)



2 牛塚1号墳墳丘断面
(北から)



3 牛塚1号墳墳丘断面
(南から)

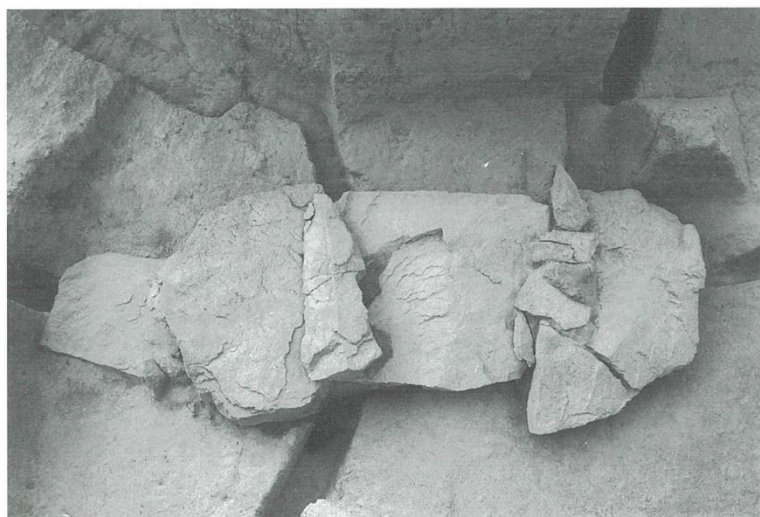
1 牛塚1号墳墳丘断面
南北畦除去後(北から)



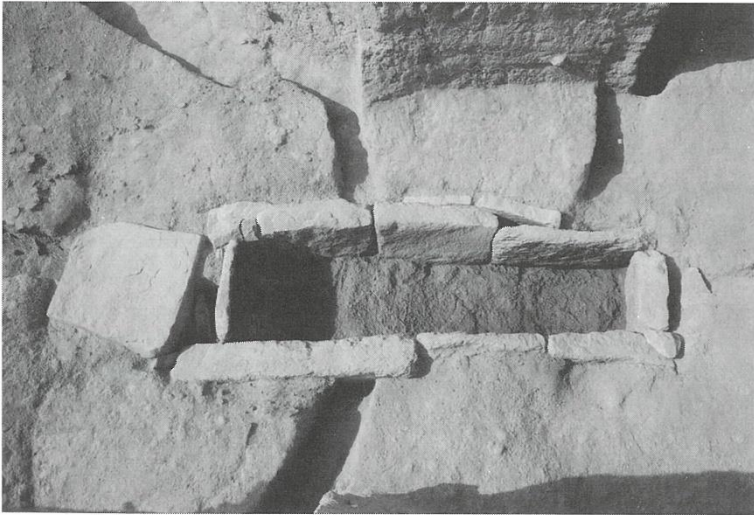
2 牛塚1号墳第1主体
検出状況(北から)



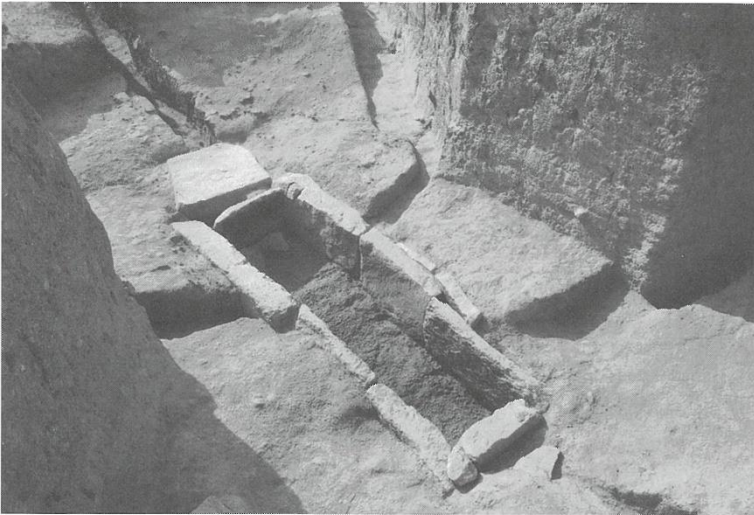
3 牛塚1号墳第1主体
検出状況(東から)



図版6



1 牛塚1号墳第1主体
蓋石除去（北東から）

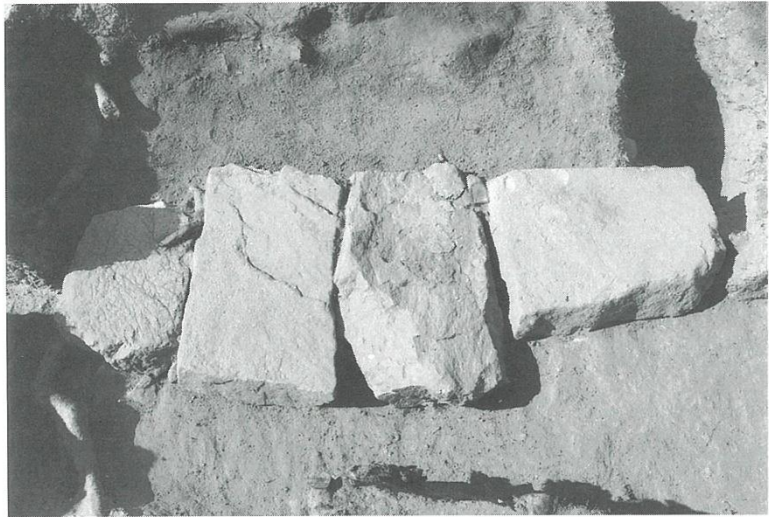


2 牛塚1号墳第1主体
蓋石除去（北から）



3 牛塚1号墳第1主体
鉄器副葬状況（北西から）

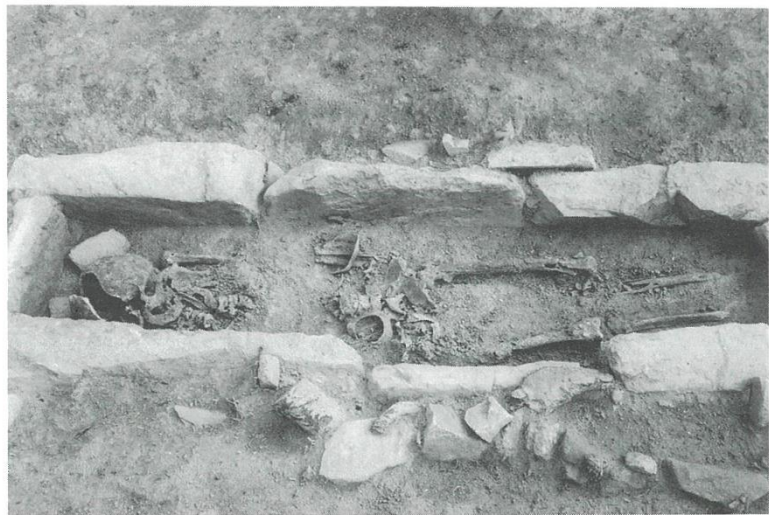
1 牛塚1号墳第2主体
検出状況(北東から)



2 牛塚1号墳第2主体
人骨検出状況(南東から)



3 牛塚1号墳第2主体
人骨検出状況(南西から)



図版8



1 牛塚1号墳第2主体
鉄器副葬状況(南西から)



2 牛塚1号墳第2主体
鉄器副葬状況(北西から)



3 牛塚1号墳調査風景

1 牛塚1号墳調査後近景
(南東から)



2 牛塚1号墳調査後近景
(北から)



3 牛塚1号墳調査後近景
(北東から)





1 牛塚2号墳調査前近景
(西から)



2 牛塚2号墳墳頂五輪塔
(南西から)



3 牛塚2号墳墳頂五輪塔
(北から)

1 牛塚2号墳南側周溝
(西から)



2 牛塚2号墳北側周溝
(北西から)



3 牛塚2号墳主体部
検出状況(南東から)



図版12



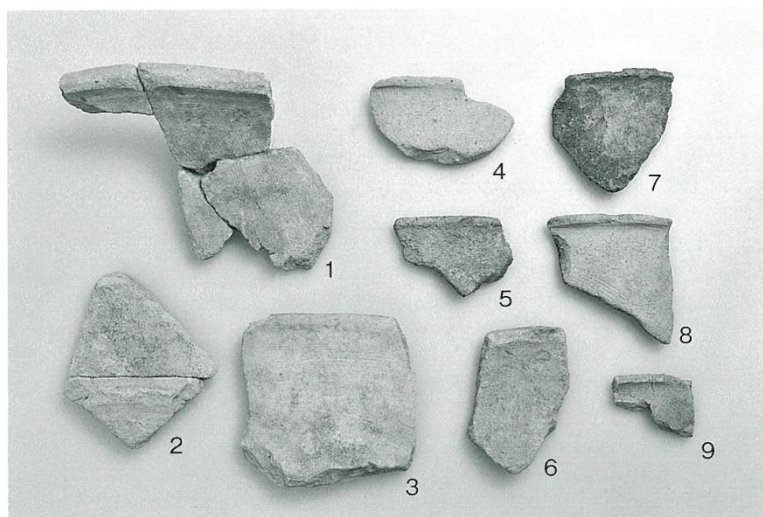
1 牛塚2号墳主体部
検出状況(南から)



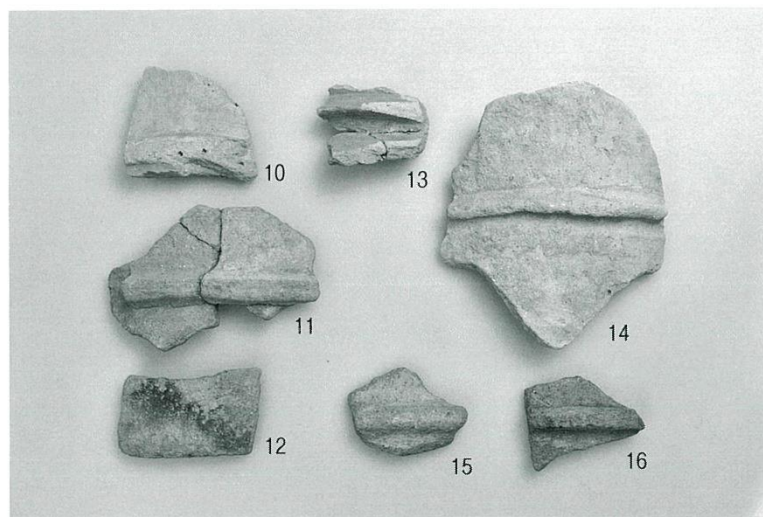
2 牛塚2号墳調査後近景
(南から)



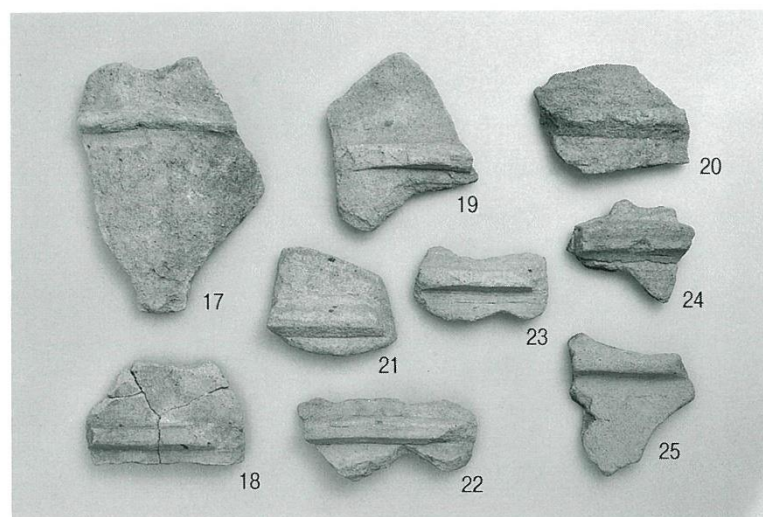
3 牛塚2号墳調査後近景
(南西から)



1 牛塚1号墳出土埴輪①

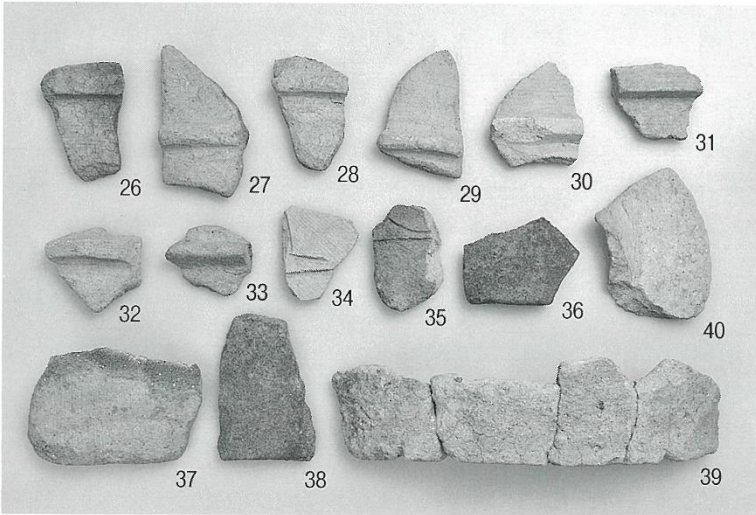


2 牛塚1号墳出土埴輪②

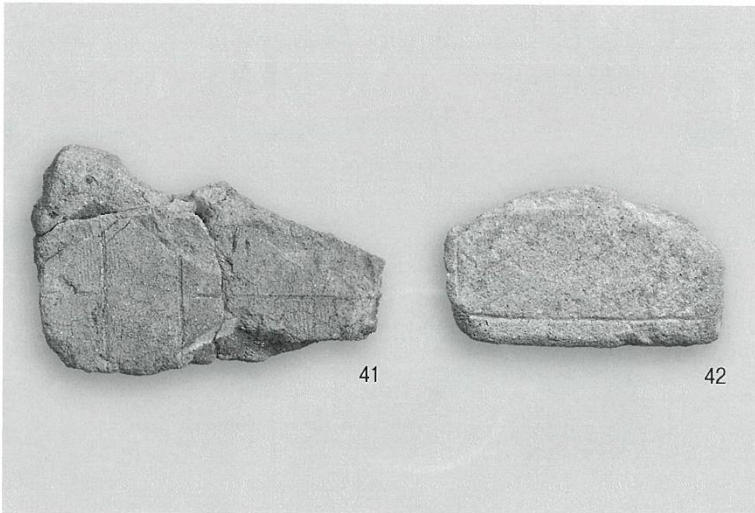


3 牛塚1号墳出土埴輪③

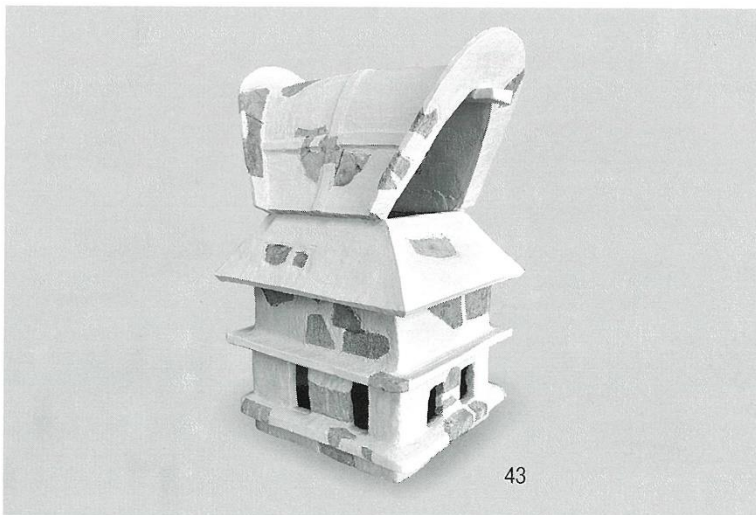
图版14



1 牛塚1号墳出土埴輪④



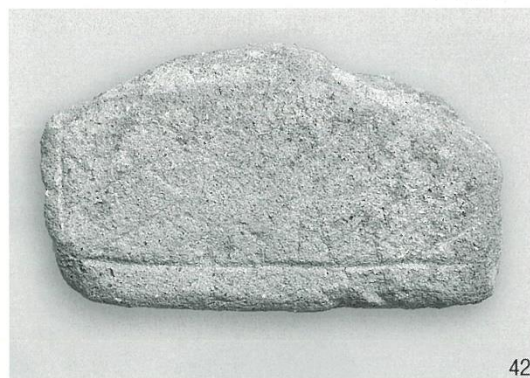
2 牛塚1号墳出土埴輪⑤



3 牛塚1号墳出土埴輪⑥



1 家形埴輪屋根部片①



2 家形埴輪屋根部片②



3 家形埴輪破風板



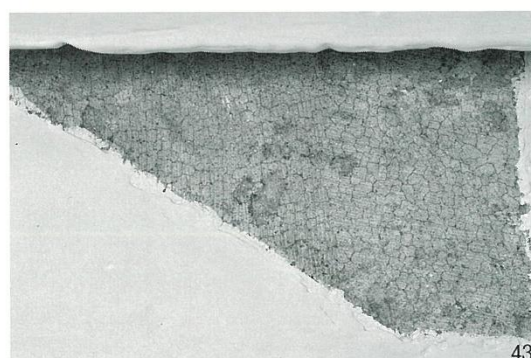
4 家形埴輪上屋根側面突帯



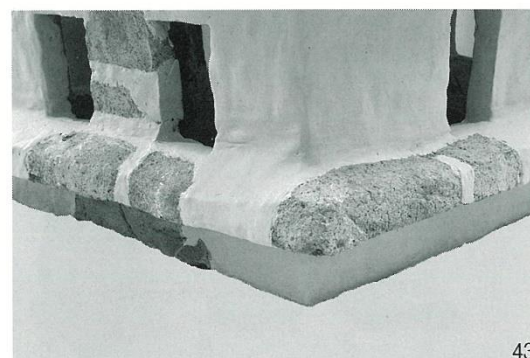
5 家形埴輪棟木



6 家形埴輪身舎外面①

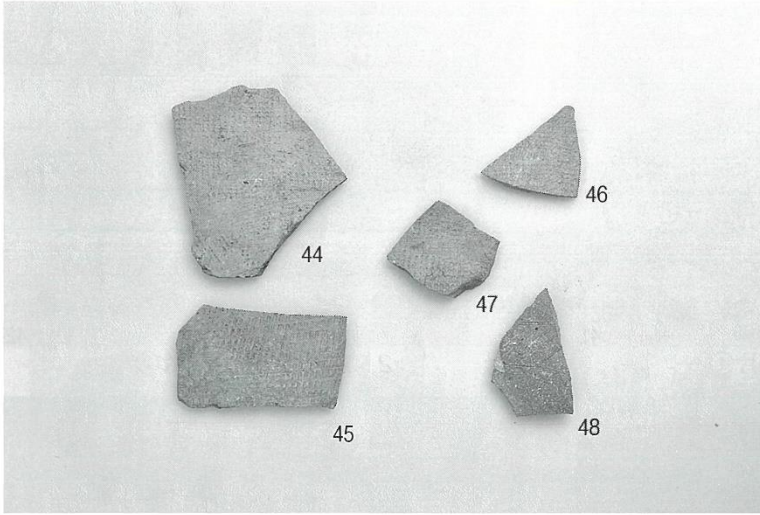


7 家形埴輪身舎外面②

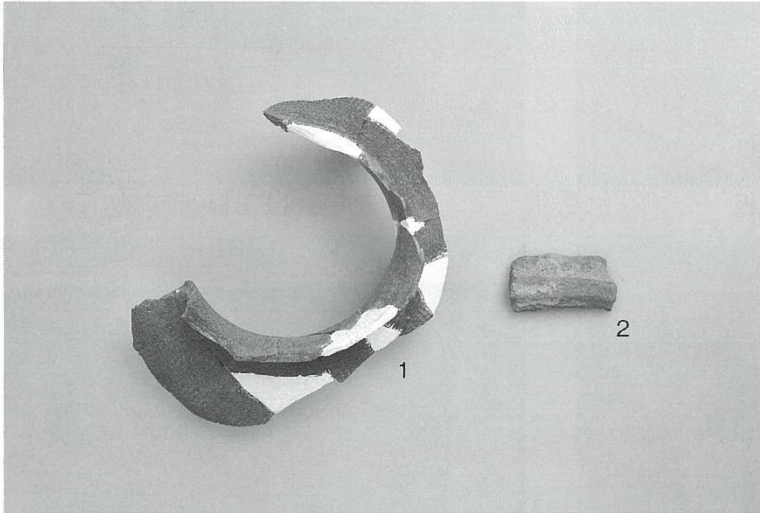


8 家形埴輪裾廻突帯

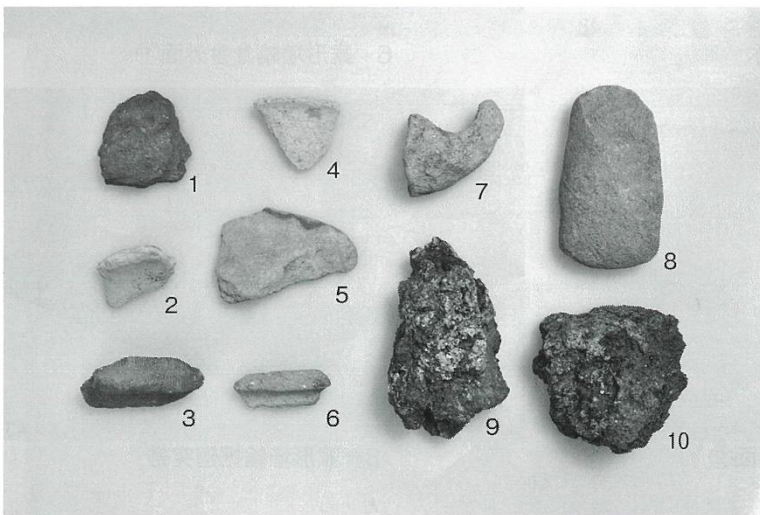
図版16



1 牛塚1号墳出土須恵器



2 牛塚2号墳出土遺物



3 古墳に伴わない遺物



牛塚1号墳副葬鉄器

報 告 書 抄 録

ふりがな	うしづかこふんぐん							
書名	牛塚古墳群							
副書名	スズキ株式会社岡山総社納整センター建設に伴う発掘調査（1）							
巻次								
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	26							
編著者名	村田 晋							
編集機関	岡山県総社市教育委員会							
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363							
発行年月日	2017（平成29）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発 掘 面 積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うしづかこふんぐん 牛塚古墳群	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 くしろ 久代	33-208	1393 1394	34°40' 16.64"	133°41' 21.57"	平成11年 11月1日 ～ 平成12年 12月22日	約300㎡	自動車整備施設建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
牛塚1号墳	古墳	5世紀 前半	周溝，箱 式石棺	埴輪，須恵器， 鉄器，竪櫛，貝 釧				
牛塚2号墳	古墳	5世紀 中頃	周溝，箱 式石棺	埴輪，須恵器				
要 約	<p>新本川流域に営まれた，北側の平野部に張り出す丘陵尾根上に立地する古墳群。1号墳は径22m，周溝を備える円墳。石棺による主体部2基が検出され，鉄器，竪櫛，ゴホウラ製貝釧が副葬されていた。墳頂では円筒埴輪列，家形埴輪が出土した。2号墳は一辺9.5m前後，周溝を備える方墳。石棺による主体部1基が検出された。墳丘は削平が著しいが，須恵器・埴輪細片が出土した。また，残丘上には五輪塔が据えられており，墳丘が再利用されたことがわかる。</p>							

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 26

牛塚古墳群

スズキ株式会社岡山総社納整センター
建設に伴う発掘調査（1）

平成 29（2017）年 3 月 31 日印刷

平成 29（2017）年 3 月 31 日発行

編集発行 岡山県総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目 1 番 1 号

印 刷 柳本印刷株式会社
岡山県総社市総社一丁目 10 番 24 号

